IS:仮面ライダーW

タジャドル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ：仮面ライダーＷ

【Ｎコード】
Ｎ８５７１Ｖ

【作者名】
タジャドル

【あらすじ】
《ＩＳ》通称インフィニット・ストラトス。ＩＳは女性しか動かせない。だが、織斑一夏はある日ＩＳを動かしてしまった！！そして、《二人で一人の仮面ライダー》である左　翔太郎・フィリップは一夏がＩＳを動かしてしまった一週間後に政府からこんな依頼が来た「「織斑一夏の護衛？」」

仮面ライダーＷ　インフィニット・ストラトスのクロスオーバー！！

第一話：「私は三国志の英雄達ではない」ｂｙ織斑千冬

「……」

「……」

とある男二人は石の様に動かず、沈黙を貫いていた。

一人目はダラダラと冷や汗を掻きながら、二人目は少し涙目になっている。

《ＩＳ》通称：インフィニット・ストラトス。

現在の世界最強兵器である。

世界最強兵器、という言葉はそれなりに響きはいいかもしれない。だが、モノには全てにおいて欠点がある。それは《ＩＳ》にも当てはまる。その欠点は、

『女性にしか動かせない』

この事により、女尊男卑という価値観があっという間に世界に広がった。

《ＩＳ》を造ったのが日本人だったので、各国が『パワーバランスが崩れかねない』という事で、情報開示やらなんやら言ってきて、

『ＮＯとは言えない日本人』は各国の次々の要求を呑んでいった。
それが『アラスカ条約』ある。

とある男二人がいる場所は《ＩＳ学園》という所である。《ＩＳ操者》は『アラスカ条約』で日本が育成する事になっており、《ＩＳ学園》は《ＩＳ操者育成機関》なのである。

だから、当然の如く《ＩＳ学園》には女性しかいない。じゃあ何故男が二人もいるのか？答えは簡単だ。それは、

『男がＩＳを動かしたから』である。

しかも世界初。

二人目、左　翔太郎は違う理由でこの場所でいるが、一人目、織斑一夏がＩＳを動かしたためにここにいる。

織斑一夏が何故ＩＳを動かしたのか、それは藍越学園に受験会場に行った時、道に迷ってしまった。なんでもいいから目に入った扉を開けるとそこに《ＩＳ》が鎮座していた。ｏｒｚになりつつも何となく触ってみると、アラ不思議。なんと《ＩＳ》が起動したではありませんか！そんなわけであれよこれよと《ＩＳ学園》への入学が決まっちゃったんだよなー、これが。バカだな。うん。

（……なんだこれはーッ？）

二人目こと左　翔太郎はエコの街、『風都』の探偵、《仮面ライダ

ー》である。相棒が一人いるのだがその説明は後ですることとして、《ＩＳ》を動かせない彼が何故こんな場所にいるかというと、日本政府の依頼である。

『織斑一夏の護衛』

これが政府の依頼内容である。

世界初の男性《ＩＳ》操者だ。《ＩＳ学園》は治外法権で『どの国にも所属しない一個の国』と定められているが、不確定要素（イレギュラー）がある可能性もあるので、守りを固めても悪くはない。だが、

（クソッ？亜希子のヤツ。依頼料がかなり良いからって安請け合いしやがって？やるのは俺達なんだぞ？こんな状況に放り込みやがった張本人はいないしっ？）

護衛する本人は不満たらたらであった。しかも、

（なんでまた高校生やらないといけないのかよッ？）

いつもの仕事着ではなく、《ＩＳ学園》の改造なんでもＯＫ！の制服を着ている。

（あーぁ…。これだったら、まだ”フィリップ”のほうが良かったぜ…）

フィリップは彼の相棒だ。彼は翔太郎とは違い生徒ではなく、

「僕の名前はフィリップ。新しくこのＩＳ学園に教師として来た。よろしく」

とフィリップが自己紹介した途端、

「「「「「「キャャャャャャャャャャーー！！」」」」」」

爆音が響いた。

「男が三人！！」

「しかも全員イケメン！！」

「誰このイケメン？誰このイケメン！？」

「嫌いじゃないわっ！！」

なんか上下三色でメダルを使って戦うヤツに負けたオカマの台詞が聞こえたが気にしない。

フィリップもこの状況に苦笑いしている。

「し、しし静かにしてください～！」

もう一人の教師で「大人っぽく見せようとしたが、返って子供っぽく見える」山田真耶が収めようとするが、全然ダメである。

騒いでいる女子。興味がないのか、本を読んでるフィリップ。まだ

爆音が耳に反響していて呻いている一夏。何となく持ってきたルービックキューブで遊んでいる翔太郎。なんて混沌（カオス）。

その混沌（カオス）を撃ち破ったのが、

「静かにしろッ！！この馬鹿どもがッ！！」

山田真耶と同じく《ＩＳ学園》の教師、そして世界最強の《ブリュンヒルデ》である織斑千冬が怒鳴った。するとスッと、静かになった。流石はーー

「げぇッ！？関羽！？」

スパァンッ！！

「痛ってぇッ！？」

「誰が三国志の英雄だ」

呻いていた一夏は千冬の怒鳴り声で反応し、そう言った。

（どっちかと言うと、呂布のほうがあってーーー）

スパァンッ！！

「るぽんっ！？」

「いい度胸だな……」

今度は翔太郎が出席簿（切り札）で叩かれる。

（いや、これなら曹操のほうが合っている）

スパァンッ！！

今度はフィリップが出席簿（切り札）で叩かれる。

「このクラスはいい度胸しているヤツが多いな……！」

怒りで体を震わす千冬。だが翔太郎は、

（心が読まれているだとッ！？まさかしょかーー）

「諸葛亮孔明ではないッ！！」

グシャアッ！！

千冬の渾身の一撃で普通では出てはいけない打撃音が翔太郎の頭から出た。

「「翔太郎ー！？」」

フィリップと一夏が叫ぶ。

朝のホームルームは翔太郎の犠牲により終了した。

「キミタチハダレダ？」

「「「「「「「「「！？」」」」」」」」」

第二話：「たすてけ」ｂｙ織斑一夏（前書き）

前半キャラ崩壊です…。

第二話：「たすてけ」ｂｙ織斑一夏

「……うん？何処だここ？」

翔太郎は目を覚ました。

「……ああ、そういえば俺は千冬さんに叩かれて気を丸一日気を失っていたのか」

ここは《ＩＳ学園》の学生寮。二人部屋で行ったことはないが、高級ホテルの一室と似てるなと翔太郎は思った。

翔太郎は時計を見ると、既に朝のホームルームが始まっている時間だった。

「やべぇな。早く行かないとな」

翔太郎は急いで部屋を出た。幸いに学生服は着ていたため準備はしなくて済み、走って教室へと向かう。

何故翔太郎が学生寮で寝ているのかと言うと、それは第一話の最後に翔太郎が千冬の渾身の一撃により記憶喪失になってしまった。そのことに焦った千冬はもう一度「チェストーー！！」と叫びながらまた翔太郎を叩いた。それを見たフィリップは「何をやっているんだ織斑千冬！！翔太郎が死んでしまう！！」とまたまた出席簿で叩こうとした千冬を山田先生と一緒に羽交い締めにする。一夏が「何やってんだ？千冬姉！？そんなんじゃ翔太郎の記憶は戻らないぞ！！」と言うが、千冬は「大丈夫だ！！こういう状況の時は頭を叩け

ば戻ると本で書いてあったら良いなと思う！！」「思うのかよ！！てか思うなよ！！」と何か漫才みたいな感じで取り敢えず翔太郎を保健室に運んだが保健室の先生、天風　？時雨（あまふり　？しぐれ）は大の男嫌いで「おおお男！？うわー？来ないでー！！」と保健室にあるありとあらゆる危ない薬品を投げてきて、翔太郎を運んでいたフィリップと一夏は全力で逃げた。そして投げられた薬品の一部が翔太郎にあたり服の一部が溶けた。「やっべー！？どうしましょうフィリップさん！！」と一夏。「落ち着きたまえ織斑一夏！！こういう場合はタイムマシンを捜すんだ！！そうすれば全てが解決する！！」とフィリップが近くに有った自動販売機に頭を突っ込む。「マジですかっ！？ってそうじゃねぇよ！？」一夏がノリツッコミをし、自販機に頭を突っ込み、忘れられている翔太郎。なんて混沌（カオス）？

フィリップと一夏の帰りが遅いので、様子を見にきた山田、千冬、何故か篠ノ之箒がその混沌（カオス）を見て一夏とフィリップを正気に戻し、全員で翔太郎に割り振られた部屋に運び、ベットに寝かせたのである。なげぇ…。

「はぁ……はぁ…。何とかギリギリ間に合ったな」

走って乱れた息を整えて教室の引き戸に手を掛ける。そして、

「スイマセーン。遅れましたー」

と言って教室に入ると、

「……」

「……」

何故か睨みあっている一夏と《イギリス代表候補生》のセシリア・オルコットがいて、一部の生徒が此方をみて「空気読めや」とキツい視線を浴びせかけていた。その状況を翔太郎は、

「く、クラス間違えました～」

そう言って教室を出た。

「……ふぅ。帰って寝るか！」

当然の如く千冬に出席簿で叩かれたのは言うまでない。

ーーーーーーーーーーーーーーー

お昼時間になり出席簿で叩かれた翔太郎とため息をしている一夏とついてきた箒とフィリップで《ＩＳ学園》の食堂へと来ていた。

《ＩＳ学園》の食堂は留学生が多いため、世界全ての料理が揃えられている。翔太郎と一夏と箒は和食定食。フィリップはインドカレ

ーである。

皆で座れる所を見つけ、翔太郎は一夏に何故セシリア・オルコットと睨み合っていた理由を聞く。

「ふーん。クラス代表を賭けた決闘ねぇ…」

「……ああ」

「あれは自業自得みたいなものだ」

箒が一夏に追い討ちをかける。

「まあ、諦めたまえ織斑一夏」

フィリップは笑いながら一夏に言った。

「ぐはっ」

「しょうがねぇさ。頑張れよ！」

翔太郎が一夏に発破をかける。だが、

「何を言っているんだ翔太郎？君も戦うことになっている」

フィリップはインドカレーを食べながらそう言ってきた。

「何ぃーー！？って熱っ！？」

驚きで飲んでいた味噌汁を零してしまった。

「ああ！！そうだった！！」

落ち込んでいた一夏が一転してものすごく嬉しそうな顔になった。
忘れていたようだ。

「何で俺も戦わなきゃいけないんだ！？」

「君もクラス代表に推薦されたからに決まっているだろう？」

何を言っている？と言わんばかりの顔している。

（何でＩＳ動かせないのに決闘なんかやらなきゃいけねぇんだ？）

翔太郎は《ＩＳ》を動かせない。まさかＷ（ダブル）に変身しなきゃならないのか？

フィリップを見る。自分の考えを察したのか、しょうがないと苦笑いで首を縦に振る。

「はぁ…」

翔太郎もため息をはく。そして一夏が、

「ドンマイ（笑）」

イラッときて頭を叩いたのは悪くないはずだ…たぶん。

とりあえず、ＩＳの専門用語やらなんやらはフィリップが一夏に教

えることに決まった。そして箒が一夏の実力を見るために道場で剣道の試合をしたが、

「ああ、疲れた～！！」

一夏がその場で倒れこむ。

「なぜ」

「なぜ？」

一夏が聞きなおす。

「なぜ弱くなっている！？」

一夏のあまりにも弱くなっていることに箒が激怒した。

「一夏！！さてはお前ここ何年か剣を握っていなかったな！？」

「おう。中学では三年連続皆勤賞だ」

胸を張って言う一夏。言うな。

「ーーーーなおす」

「は？」

「鍛えなおす！！これではＩＳ以前の問題だ！！これから一週間休みはないと思え！！」

「はあっ!?なんでだよ!?ＩＳに剣道なんて関係ないだろうがっ!!時間のムダだっ!!」

「なんだとっ!?」

「なんだよっ!?」

一夏と箒がいがみ合う。

翔太郎とフィリップが一夏と箒を止めようとするが、「「うるさいっ!!」」と言われてしまいどうすることも出来なかった。

「どうすんだフィリップ?これじゃ一夏の特訓が出来ねぇぜ?」

二人のケンカをみながら言う翔太郎だがフィリップは、

「安心したまえ。ちゃんと考えはある」

「考え?」

疑問を唱える翔太郎

「ああ。明日にあればわかるさ」

そんな訳で次の日

「第一回！チキチキ！織斑一夏を強くしよう大作戦！！」

わぁ～！と乾いた声が響く。

「えっと…。なんでしょうか…これは？」

正座させられた一夏。

「そのままの通りだぜ。一夏。弱くなってしまったお前を代表候補生なみに強くしよう！と言う企画だ」

「まあ、その通りだ、頑張りたまえよ」

翔太郎とフィリップが一夏の疑問に答える。

「えっ…なんで？」

「そりゃ…、お前が箒の特訓を不満を持っていただろ？だからコッチで準備させてもらったぜ」

と言って翔太郎が入って来てくれと言った。道場に入ってきたのは、

「な”っ！？」

山田先生、箒、そして我らが覇王、織斑千冬だった。

「来たぞ。フィリップ、翔太郎」

「一緒に頑張りましょうね！織斑くん！」

「……ふん！！」

三者三様の反応をする。

「この僕たち含めて五人が君のコーチだ」

え”っ？と言葉を放つ一夏を無視してフィリップは喋る。

「ＩＳの専門用語や知識は僕と山田先生が担当することになった」

「わかりやすく教えますから頑張りましょう！」

ガッツポーズをする山田先生

「そしてＩＳの実戦訓練はこの私が受け持つことになった。どうだ嬉しいだろう？」

すごいドＳな笑顔で言う千冬

「そして俺と篠ノ之で格闘訓練と剣術を教える」

「さあ…、殺ろうか一夏？」

木刀を構える箒

「えと…私めに拒否権は「「「「「「ない」」」」」」デスヨネー」

その日一夏の叫び声が学園全体に響いた。

第二話：「たすてけ」ｂｙ織斑一夏（後書き）

話が進まない…

第三話：「私の出番がございませんわ！」ｂｙセシリア・オルコット（前書き）

駄作が出来上がりました。

第三話：「私の出番がございませんわ！」ｂｙセシリア・オルコット

『『『『『『『マスカレイド』』』』』』』

という電子音が駅前のショッピングモール『レゾナンス』に響き渡る。

その辺りを歩いていた人たちがその音に疑問を持つ。

ザンッ！！

突然上から黒いスーツに顔がレスラーのような人が沢山降りて来た。

それを知っている者であるなら『マスカレイドドーパント』と呼ぶだろう。

そしていろんな所からマスカレイドドーパントが現れ始める。

一体何が起きているかわからない一般人たちは呆然している。

その呆然している一般人の中からニタニタしているヤツがポケットからやたら装飾が施されているＵＳＢメモリを取り出す。

『アノマロカリス』

電子音が響き、その姿が異形なモノに変わる。

それを見た一般人が驚き、それが叫びと変わる。

叫び声とともにマスカレイドドーパントと『アノマロカリスドーパント』が『レゾナンス』を破壊し始める。

『ハハッ！！イイねェッ！！サイッコーに楽しいねェッ！！ブッ壊すコトがこっナンにタノシイなんてよぉ！！』

アノマロカリスドーパントが店やエスカレーターなど破壊しながら叫ぶ。

マスカレイドドーパントたちは店の金や品物など盗んだり、破壊などをしている。

『モットやっちまいナァッ！！ハカイハカイハカイだー！！！！』

一般人が巻き込まれないように逃げている。だが、それを逆らうようにアノマロカリスドーパントに向かって人混みを縫うように走っている人がいた。

『フハハハハハハハッ！！ハカイハカイハカイハカイハカイハカ「ウラぁ！！」へぶぅ！？』

アノマロカリスドーパントはおもっいきり蹴られて吹っ飛んだ。

「ったく。さっきからハカイハカイうるせぇよ！ちったぁ静かにしろ！」

帽子を被り直しながらウンザリした様子でいう翔太郎。

『ダレだテメェ！！』

身を起こすアノマロカリスドーパント

「俺は左　翔太郎。テメェを倒す男だ。覚えおきな」

と言って翔太郎は『ダブルドライバー』を付ける。

「フィリップ！！」

「J」と書かれた《ガイアメモリ》を出し、ガイアウィスパーを鳴らす。

《ジョーカー》

IS学園教員寮

「ーーでこれが…うん？」

フィリップが一夏にISの専門用語を山田先生と教えているときにフィリップにダブルドライバーが現れた。

「どうかしましたかフィリップさん？」

山田先生が疑問を唱える。一夏は頭から煙が出てオーバーヒートしている。

「ええ。少し用事が。あとはよろしくお願いします。山田先生」

フィリップは「C」と書かれた《ガイアメモリ》を出してガイアウィスパーを鳴らす。

《サイクロン》

レゾナンス三階中央

「『変身!!』」

翔太郎がそう言うと「C」のメモリががダブルドライバーに転送される。「J」のメモリをダブルドライバーに差し込み、横に開く。

《サイクロン・ジョーカー》

音ともに突風が吹き、前が見えなくなる。

『うおッ!?前が見えねェッ!?』

突風が消え、前が段々と見えてくる。
そしてアノマロカリスドーパントは見た、それは、

『ナ…ナンダ?緑?黒?どっちダ?』

アノマロカリスドーパントは見たそれに疑問を投げかける。

『どっちもだ。』

翔太郎が喋る。

『僕達はドーパントを倒す風都の仮面ライダー…』

フィリップが喋る。

『風都ってイヤァ…、まさか!?あの…!?』

アノマロカリスドーパントが何かに気がついてうろたえ始める。

『『Wだ』』

翔太郎とフィリップが続ける

『さあ、いくぜ?フィリップ』

『ああ。翔太郎』

『『さあ…』』

言葉を一旦止め、そして。

『『お前の罪を数えろ!!』』

風都のライダー、仮面ライダーWがそう言い放った。

何でこんな状況になっているかと言うと、それは

「うおォォォォォォォォォッ！！」

一夏が１２０％のチカラで、

「まてぇ！！一夏ぁ！！」

「待てやコラァ！！」

鬼の形相で追いかけてくる箒と翔太郎から逃げている日に遡る。

「一夏ぁ！！逃げるなぁ！！今止まるなら三分の四殺しで許してやるっ！」

「アホかっ！！ほとんど死んでんじゃねぇかっ！」

第一回！チキチキ！織斑一夏を強くしよう大作戦！から四日経っている。

それは厳しい四日間だった。

フィリップ・山田先生のＩＳ座学。織斑千冬とのＩＳ実戦訓練。箒・翔太郎の近接戦闘訓練。ぶっちゃけ訓練という名のいじめ。

四日間これの繰り返し、頑張って来た一夏だが、流石に我慢が出来なかったようで、フィリップ・山田先生のＩＳ座学の時間に部屋から脱走した。

一夏を捕まえるため、箒と翔太郎が追いかけている訳である。そして、

「捕まえたぞ。一夏…！」

「ぎゃあああああああっ！」

一夏が箒（死神）に捕まった。

「さあ、お前の罪を数えな」

遅れて来た翔太郎が『スタッグフォン』出して、

「フィリップか？一夏を捕獲したぜ。今そっちに行く」

『分かった』

スタッグフォンをポケットにしまい一夏に、

「一応聞こうか。何故脱走なんかした？」

「自由が欲しいんです！！だから自由という名のゴールへ行かせて下さい！！お願いします！！」

一夏が土下座する。すると箒が綺麗な笑顔で、

「安心しろ一夏。絶望がお前のゴールだ」

そう言い放った。可哀想に。

真っ白に燃え尽きた一夏を翔太郎がズルズルと引きずりながら歩いていると、織斑千冬が此方に向かって来た。

「ここに居たのか。左」

「どうしたんスっか。千冬さん」

「軍の人間が来ているぞ」

「軍の人間？何でそんな奴らが」

「何でもお前とフィリップに用が在るらしい。そのバカは此方で預かる。だから行ってこい。場所は応接室だ」

じゃあたのんますと千冬に一夏を預けて応接室へと走る。

ＩＳ学園・応接室

「……」

「……」

フィリップとその前にいる日本ＩＳ部隊《撫子（なでしこ）》隊長　白並（しらなみ）　鏡理（きょうり）はトランプでババ抜きをしていた。

フィリップ1枚

白並2枚

ババ抜きで有りがちな展開になっていた。

翔太郎が来るまで暇つぶしでやろうと白並が言い、フィリップも軽くそれを受けた。最初は大富豪をやっていたが、フィリップの全勝により、白並が涙目になって「つ、次はババ抜きをしましょう！！」と言い出して現在に至る訳である。

「……むむっ」

「ふむ…」

フィリップが白並のカードに手を伸ばした。そしてカードを手に取り、

「僕の勝ちですね。白並さん」

「……また負けた」

うな垂れる白並はもう一度再戦を頼もうとしたが、

「すまねぇ。遅れちまった……ってフィリップ、何で俺睨まれてんだ？」

「あはは……」

「……別に睨んでません」

「は、はぁ…？っとそうだった。俺とフィリップに用ってなんですか？」

「っ、そうでした。改めまして私は日本第一ＩＳ部隊《撫子（なでしこ）》隊長　白並鏡理と言います。よろしく」

「ＩＳ部隊《撫子（なでしこ）》っていやぁ…」

「ドイツ最強（シュヴァルツェ・ハーゼ）とタメを張れると言われている部隊の隊長が何故僕達の所に？」

白並は二人に写真がついた紙を渡す。

「…こりゃあ…もしかしなくて…」

「ああ。間違いない…」

「「《ガイアメモリ》」」

「やはりですか…」

出来れば間違っていて欲しかったと言わんばかりに深いため息をつ

いた。

「何故今ガイアメモリが流通しているんだ？ミュージアムは潰した筈だぜ？」

「それ以前にガイアメモリは風都でしか出回っていない筈なのに…どうして？」

「そちらの事情はこちらは知りませんが、日本全域にそのガイアメモリが出回っています。あらかたのガイアメモリは軍で回収してすでに廃棄処分が決定しています」

安堵の息を吐く二人。

「けど、四日前にガイアメモリが保管されている収容施設が何者かによって襲撃を受けました」

「「！！」」

「当然我々も抵抗を試みましたが、…ガイアメモリ、ドーパントの前では通常兵器はおろかＩＳでも歯がたちませんでした…ッ」

悔しそうに顔を歪める白並。

「「……」」

ドーパントは通常兵器では倒せない。Ｗ（ダブル）やアクセル、仮面ライダーの「メモリブレイク」でしか倒せない。いくらＩＳが世界最強兵器と云えど、ドーパントには敵わない。

ＩＳが表（最強）ならガイアメモリが裏（最悪）なのだ。

「……それで」

「それで俺達がドーパント専門に活動している事を知り、訪ねてきた…と」

「……そうです」

「盗まれた数は？」

「……およそ三百。ですね」

「さ、さんびゃく…。かなり出回っていたみたいだな…」

すると突然白並は、

「お願いします。力を貸して下さい。私達ではあれをどうすることも出来ません」

その場で頭を下げた。

二人は白並に頭をあげさせ、フィリップが、

「この依頼。政府は了承しているのかい？」

「……いえ。これは私はの独断です」

「独断って…。いいのかそれ？」

「良くない処か、最悪ですね」

苦笑いで答える。

「……では何故？」

「……悔しいんです。私達部隊は人を守るためにあるのに、ＩＳという力があるのに、私達が守れなかったせいで、盗まれたガイアメモリを使われ、これから人々を傷つけていくんだと思うと凄く悔しいんです……ッ」

「だ…だから…、私達に力を貸して下さい…ッ。お願いします…ッ！」

悔し涙を流しながら頭をさげる白並。

それに対して翔太郎、フィリップの二人は、

「……一夏の訓練時間。大幅に変えねぇとなフィリップ？」

「ああ、そうだね。こっちも山田先生に頼まなければいけない」

一夏の訓練時間の変更について話している二人を目を見開いて驚いている白並。

「……いいんですか？本当に？」

「女性の涙を見せられたら、ここで断ったら男が廃るってもんだぜ。

なあフィリップ？」

「当然だね。この依頼受けよう」

翔太郎はカッコつけながら、フィリップは白並から貰った書類を見ながらそう言った。

「あ、ああありがとうございます！！」

「それでは、検索を始めよう」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

『ふっ、ふ風都の仮面ライダーがナンでコンなトコロにいるンだッ！？」

『美女の涙に誘われて……かな？』

W（ダブル）はそんな事を言って、攻撃を仕掛ける。

『オラァッ！！』

ドーパントに蹴りを放つ。

『グオッ！？』

さらに蹴り放ち続ける。

『ク、クソッタレッ！！仮面ライダーが出てくるナンテ聞いてねェ！！！』

ドーパントは逃げようとするが、

『おっと！逃がしはしないぜ！』

『僕の側、変えよう』

《ルナ》

サイクロンメモリを抜き、黄色の《ルナ》メモリを入れる。

《ルナ・ジョーカー》

緑と黒の体が、黄と黒に変わる。

『はい。おかえり！』

Wが黄色の腕を振るうと、腕が伸びてドーパントと捕まえ、元いた場所へ放り投げる。

『～～～～～ッ！！』

地面に叩きつけられ悶絶するドーパント。

『あまり時間がない。早く決めよう』

そう言ってフィリップはルナメモリを抜いて、サイクロンメモリを入れ直す。

《サイクロン・ジョーカー》

『ああ。メモリブレイクだ』

ジョーカーメモリを抜いて腰の左に付いているメモリスロットに差し込む。

《ジョーカー　マキシマムドライブ》

Wが風で上に上がり、スロットボタンを押す。

『『ジョーカーエクストリーム！！』』

ドーパントにトドメの一撃を放つ。

けたましい爆発音が響き、使用者と壊れたガイアメモリが転がっていた。

翔太郎は変身を解き、その男に近づく。

「気絶してるか…。何処でガイアメモリを手に入れたか聞こうと思っていたんだが…、まぁそれは白並さんに任せるか」

『翔太郎さん』

と耳に付けていたインカムから白並が喋る。

「どうした？」

『「レゾナンス」で暴れていた、テロ組織「赤いカナリア」の残党の捕獲、完了しました』

「そうか。後は頼むぜ」

『はい。……それと凄いですね、フィリップさん。今日テロが起きると分かるなんて……「地球（ほし）の本棚」でしたっけ？』

「ああ。あれには地球の全てが乗っているからな。分かって当然だ」

星の本棚とは地球の記憶が全てが存在するアカシックレコードのような精神世界。真っ白な空間に無数の本棚が並んでおり、それらが一冊一冊が「地球の記憶」データベースになっており、どんな事も

調べる事が出来る。

『事後処理はこちらでしますので、今日はありがとうございました。これからよろしくお願いしします』

「こんな事はあんまり起きてほしくはないけどな」

そうですねと笑って通信が切れた。

「さーて。どっかで飯食って学園に戻るか」

翔太郎は昼飯は何を食おうか考えながら「レゾナンス」を後にした。

とある二人に見られている事も知らずに……。

第三話：「私の出番がございませんわ！」ｂｙセシリア・オルコット（後書き）

バトルシーンは難しい！！

第四話：「……えっ？」ｂｙ更織　響（前書き）

ヤバイＺＥ☆！

第四話：「……えっ？」ｂｙ更織　簪

ヒーローはどんな時でも格好いい。

これがいつ寝ても覚めても歩いていても、授業中でもこの私、更織簪はそう持っている。

スーパー戦隊シリーズで一番好きなのは「ハリケンジャー」だ。今の戦隊シリーズの「ゴーカイジャー」にハリケンジャーが出たときは何故か感動した。

感動したと言えば最終回の「仮面ライダーオーズ」で火野　映司さんがタジャトルコンボに変身した時の「タカ！クジャク！コンドル！」が串田アキラさんボイスではなく、三浦涼介さんボイスに変わっていた所は、聴いた瞬間涙が流れたのは私だけじゃないと信じたい。

閑話休題。

私は小さい頃からヒーローに憧れている。幼稚園のころは「桃太郎」とか。

初めて戦隊モノや仮面ライダーシリーズを見た時はもの凄く世界が輝いてみえた。けど、こんなのあるわけがないと気づいたときは小学一年生の頃だった……。

それでも現在進行形でヒーローに憧れている。無いものねだりと言うかもしれない。いい歳して恥ずかしいと言うかもしれない。……実際言われた。

もう一度言わせて貰います。

ヒーローはどんな時でも格好いい。

だって本当に格好よかったから……！

――――――――――――――――――――――

ＩＳ学園第二整備室

「…………ふぅ」

私の専用機、文字通りの「欠陥機」の「打鉄弐式」の調整を一旦止め、休憩する事にした。ポケットからｉＰｈｏｎｅを取り出し、データフォルダから「お気に入り」を起動させる。

「お気に入り」に入っていたのはカメラのムービーで撮った一つの動画だった。

「……♪」

嬉しそうに動画を見る。その内容とはいうと…？

「『『さあ…、お前の罪を数えろ！』』」

動画に映っていたのは緑と黒の体の…、

「『『ジョーカーエクストリーム！！』』」

仮面ライダーW（ダブル）が映っていた。

私は「レゾナンス」で起きたテロ『四一二事件』の時にその場にいたのだ。

一応これでも日本代表候補生だ。テロを想定したシュミレーションは何百、何千とやってきた。

冷静に判断してバレないように物陰に隠れる。腕時計型のＩ・ＰＢ（インフィニット・プラグバイト）（ＩＳの武装を一部だけ展開する事が出来る携帯兵器の一つ）を準備をして好機（チャンス）を伺う。

そしてリーダーと思われる人物（というか怪物）を見る。

『ハハッ！！イイねェッ！！サイッコーに楽しいねェッ！！ブッ壊

すコトがこっンナにタノシイなんてよぉ！！』

次々と破壊していく様は恐怖の対象だった。けど私には恐怖はなかった。

不謹慎だが、こんなシュチュエーションはまるきっり仮面ライダーや戦隊モノと同じだった。ここで颯爽とヒーローが出て来たら、どんなに格好いいだろう。と考えた。

そんな妄想を振り払い、その怪物に突撃しようとした時、一人の男がその怪物に向かって走り、そして

『フハハハハハハハッ！！ハカイハカイハカイハカイハカイハカ「ウラぁ！！」へぶぅ！？』

ドロップキックを食らわした。

「ったく。さっきからハカイハカイうるせぇよ！ちったぁ静かにしろ！」

その男はＩＳ学園に転入してきたもう一人男、左　えっと…、翔太郎だっけ？

「俺の名前は左　翔太郎。てめぇを倒す男だ。覚えておきな」

左さんポケットから黒いＵＳＢメモリを取り出して、

「フィリップ！！」

何故かここにはいない新しい先生の名前？を呼んだ。

するといきなり強い突風が吹き荒れる。思わず目を腕で防ぐ。

突風が収まって私は急いで左さんを視線で探す。だが、左さんはいなかった。その代わりに黒と緑の人が立っていた。

『『さあ…』』

『『お前の罪を数えろ！！』』

そう聴いた瞬間、カメラをムービーにして録画モードにしたことは決して間違いではない。

それからはずっと録画した動画をずっと鑑賞している。

スッゴク格好いい。

その一言に尽きる。

まさか仮面ライダーを実物で見ることが出来るとは思ってもみなかった。

あれは何かの撮影ではない。現実で起きた事だ。フィクションではなく、ノンフィクションだ。

動画再生数はすでに一万回を超えている。いや、それ以上かもしれ

ない。

話しがしたい。左さんと会って話がしたい。

そう思った。

その願いが叶ったのか、神様のイタズラか？それとも偶然？に

「あっれー？何処にいるんだアイツ？そろそろ一夏のＩＳ座学の時間なのに……」

左　翔太郎が現れた。

「っっっっ！？！？」

座っていたのに、その場で転んだ。

ガッシャーンッ！

と置いてあったたくさんの工具が散らばる。

「うん？そこに誰かいるのか？」

左さんがこちらに近づいてくる。

「……！（ブンブン）」

どうしよう！と慌て始める。

「っと、大丈夫かい？お嬢さん（フロイライン）」

キザっぽく、カッコつけて言う翔太郎さん。もはや病気です。

だが、今の簪さんには、

「……っっっ！？」

効くそうで、湯気出そうなくらいに顔が赤くなった。

「どうした？顔が赤いぜ。熱でもあるんじゃねぇか？」

「！？！？！？！？」

翔太郎は顔を近づけて額と額をくっつける。

「…うーん、熱はねぇけど、これは一度保健室に行った方がいいかもしんねぇな」

「☆¥＃＊〒♪$％☆○×？！？」

言葉にならない言葉で叫ぶ簪さん。何故なら…、

「とりあえず担いでいくから、少し我慢しろよ」

お姫様抱っこである。

全然男に対して耐性のない簪さんにとって「お姫様抱っこ」と言うモノは難易度が高すぎるのである。

左さんはお姫様抱っこをやめてくれそうにはないし、時折すれ違う同級生に「えっ！？」やら「お姫様抱っこ！？」やら「私、聞いてない！？」やら「藤乃は…泣いていいですか？」やらそんな声が聞こえる。は、恥ずかしい…。

そして保健室につき、

「失礼ーしま…って誰もいないか」

いたらいたで、大変な事になっていたかもしれない…。

私は左さんにベットに寝かされ、体温計と冷えピタを渡される。

「じゃあ、後は寝て、ゆっくりしてれば下がると思うぜ」

「……は……はい……」

じゃあ、俺はフィリップを探さなきゃいけねぇから。と言って保健

室を出ようとする。

「あ、ああの！」

「うん？」

「あ、あありがとう…ございい……ま、ました……っ！」

「男して当然の事をしたまでだ。きにすんな」

と笑って保健室を出て行った。

「……」

ぼーーっとしている簪さん。

「～～～～～～～っ！！」

急に恥ずかしくなり、布団をかぶる。

「左……しょ……翔太郎さん……」

何故だか胸がドキドキしてきた。それと同時に、ポカポカと温かくなってきた。

これが人を好きになる『恋』と言うヤツなのだろか？

「わ、私の……ヒーロー……」

になってくれるだろうか。

ヒーローはどんな時でも格好いい。

私は間違っていなかった。

次の日、一日中笑顔の簪さんがいたとう……。

第四話：「……えっ？」ｂｙ更織　響（後書き）

駄文しか書けない作者をお許しください…っ！

第五話：「私はツンデレではないっ！！」ｂｙ篠ノ之　箒（前書き）

駄作です。

第五話：「私はツンデレではないっ！！」ｂｙ篠ノ之　箒

第三アリーナ・Ａピット

「……やる事はやった」

腕を組んで神妙に喋る翔太郎。

「ＩＳ実戦訓練に、ＩＳ基礎知識、そして近接戦闘訓練…」

「抜かりなく全てをやってきた。一夏が「…バスケがしたいです」ってな感じで頑張ってきた！きたのに…！」

拳をこれでもかってぐらいに握りしめて

「「何故俺の（一夏の）ＩＳが来ないんだ！！」」

一夏と翔太郎の叫んだ。

今日は待ちに待った？クラス代表決定戦。相手はイギリス代表候補生の金髪ロール…もといセシリア・オルコットだ。だが、戦うためにはＩＳが必要なのに、そのＩＳがまだ届いていないのだ。

「翔太郎。落ち着きたまえ。叫んでいても何の意味もない」

「そうだぞ一夏。フィリップ先生の言う通りだ。少し静かにしろ」

「「と言いながらもちょっとイライラしてる箒さんであった　まる」」

棒読みで作文風に言う二人。

「……そんなことはないぞ」

顔を反らす箒さん。

「ちょっと見ました一夏さん？自分の事を棚にあげたわよ？」

「見ましたわよ翔太郎さん。ひどいわよね。ほんとに素直じゃない幼馴染みだこと」

オネェ言葉で箒を批難する。キモイ。

「なっ！？そ、そんなこと、あ、ある訳ないだろうっ！！」

「まあ、見苦しい言い訳ねぇ一夏さん？」

「ホントよねぇ翔太郎さん？素直になりな、もぉっ！！」

とりあえずオネェ言葉がウザイ二人。

「でもね？私達…」

「そのツンデレ…」

声を揃えて、

「「嫌いじゃないわっ！！」」

とりあえずウザイ。

「う、うるさい黙れーっ！！特に一夏ぁっ！！」

どこからか取り出した木刀を持って一夏を追いかける。

すべてを振りきるぜっ！！と言って逃げ回る一夏。

「……何をやってるんだい？」

「いや…何かノリで？」

クラス代表決定戦である。

第三アリーナ・Ｂピット

「……何やら向こうが騒がしいですわね」

一夏達とは反対側のピットにいるセシリア・オルコットは高級感あふれる椅子に座って優雅に紅茶を飲んでいた。

「お嬢様。紅茶のおかわりはいりますか？」

幼馴染みで専属メイドの「チェルシー・ブランケット」がセシリアの隣に立つ。

「ええ。欲しいですわ」

チェルシーは紅茶を注いで、

「向こうには今回の対戦者の織斑一夏と左　翔太郎がいらっしゃいます」

「それは知っています。緊張感もなく騒いでいることに呆れているだけですわ」

「そうですか」

すこし微笑み、

「……」

Aピットの方を眺めた。

「？どうかしましたかチェルシー」

「いえ。何でもありません」

ニッコリと笑う。

「お嬢様。紅茶のお菓子はどうしましょうか？クッキー、スコーン、ケーキなどありますが」

「そうですわねぇ…。クッキーでいいですわ」

空中ディスプレイを出して専用機の「ブルーティアーズ」の調整をしながらクッキーを食べる。

「いつも美味しいですわね」

顔が綻ぶセシリア。

「ありがとうございます」

「貴女も一緒に食べましょ」

「いえ。私はメイドです。そうする訳にはいけません」

大袈裟な態度で言うチェルシー。

「なら幼馴染みとして一緒に食べましょう」

「……もふもふ」

「もう食べてるっ！？」

もふもふリスみたいに食べるチェルシーさん。

「ひゃっておにゃかひいていひゃから（だってお腹空いてたから）」

メイドモードから幼馴染みモードになっていた。

「……もう。紅茶飲む？」

「……んくっ。（コクッ）」

クッキーを飲み込みながら頷く。

しばらく談笑しているとと

「お嬢様。もうすぐお時間です。準備を」

幼馴染みからメイドに戻るチェルシー。

「ええ。わかりましたわ」

ハンカチで口元を拭き、立ち上がり制服を上から一枚一枚脱いでいく。たが裸にはならず、ＩＳスーツを着ていた。

「来なさい。ブルー・ティアーズ」

待機状態のイヤリングを指で軽く弾くとキィンッ！と音ともに光り、展開されていく。

青いドレスの様な装甲。特徴的なフィン・アーマーを四枚背に従え、どこかの王国騎士のような気だ高かさを感じさせる。左手には二メ

ートルを超す長大な銃器、六七口径特殊レーザーライフル『スターライトｍｋ？』を持っている。

「では行ってきますわ」

「ご武運を」

セシリアはフィールド（空）へと飛び立つ。

第三アリーナ・Ａピット

「はぁ……はぁ……ッ」

「……どうも……すいません……」

そこには一夏を追い回し、木刀でボッコボコにして息を荒立てている箒とボッコボコにされたボロボロなった一夏が倒れていた。そして

タイミングが悪いことに

「お、織斑くん！！織斑くんのＩＳがーーーってどうしたんですか！？そんなボロボロで！」

山田先生が悲鳴をあげる。だが千冬は、

「山田先生。無視してくれ。そのバカは自業自得でそうなったのだから」

ごもっともである。

「そ、そそれとですねっ！来ましたよ！織斑くんの専用機！」

山田先生は指を指す

「ーーーーえ？」

一夏は指をさされた方向を見る

そこには

『白』が、いた。

「これが……」

「はい！織斑くんの専用機『白式（びゃくしき）』です！」

一夏は起き上がり『白式（びゃくしき）』に触る。

「……あれ？」

一夏は試験の時に、初めてＩＳに触れた時に感じたあの電撃のような感覚がなかった。ただ馴染む。理解できる。これが何なのか。何のためにあるのかが分かった。

装甲を開いている『白式（びゃくしき）』に一夏は体を任せる。すぐに一夏の体に合わせて装甲が閉じる。

「ＩＳのハイパーセンサーは問題なく動いているな？一夏、気分は悪くないか？」

ハイパーセンサーでいつもと同じ態度に見える千冬の、その微妙な声の震えまで知覚できる。

「大丈夫。行ける」

「そうか」

それとなく一夏は箒の方に意識を向ける。

「箒」

「な、なんだ？」

「行ってくる」

「あ……ああ。訓練の成果見せてこい！」

一夏はピット・ゲートに進む。かすかに体を傾けるだけで、白式はふわりと浮かび上がって前へと動いた。

ゲート開放まで2．０５７１８４２２秒ーーーー『敵』がそこ（フィールド）にいる。

けど一個だけ、気掛かりな事がある。

それは、

「翔太郎達。どこに行ったんだ？」

少し前、一夏のＩＳ白式（びゃくしき）が届いた時、翔太郎のスタッグフォンにＩＳ部隊《撫子（なでしこ）》の隊員から

『反ＩＳ団体《不朽の鴉》がＩＳ部品・武装製造工場「月巳」を襲撃。《不朽の鴉》はガイアメモリを所持。応援に』

そう連絡がきた。
翔太郎はすぐに「ハードボイルダー」に乗り現場へ向かい、フィリップは安全に変身できるように自分の教職員寮に向かった。

「「変身！！」」

《サイクロン・ジョーカー》

Wに変身し、スタッグフォンで「リボルギャリー」を呼び出す。

『まったく！こっちはクラス代表決定戦があるってのに！』

『しょうがないさ。むこう（ドーパント）にはそんな事関係ないのさ』

『で《不朽の鴉》の事は分かったのか？』

『ああ。《不朽の鴉》は男性１５０人で構成されている金で動く傭兵集団で各国の要人のボディーガードや紛争地域に武器商人などで活動している』

フィリップは言葉を続ける。

『だがＩＳの出現により活動が減少してしまい、女尊男卑のせいで

危機的状況に陥っている。その事により……』

『ガイアメモリに手を出した』

『そうだね』

ＩＳの出現で何千という傭兵集団が解体、軍による殲滅任務で減少している。

だがガイアメモリの出現で日本各地でテロが起きている。ＩＳに唯一対抗できる兵器として。

『ったく。カラスはカラスらしく巣にいればいいのによっ！ぜってー鳥かごに押し込んでやるっ！！』

ブォォォオンッ！！と後ろから巨大な車「リボルギャリー」が来た。

リボルギャリーの上ハッチが空き、ハードボイルダーを乗り上げる。

『「ハードタービュラー」に換装しよう』

ハードボイルダーを飛行滑走翼ハードタービュラーに換装し、飛んで現場へ急ぐ。

「あら。逃げずに来ましたのね」

セシリアがふふんと鼻を鳴らす。また腰に手に当てたポーズが様になっている。

「最後のチャンスをあげますわ」

腰に当てた手を俺の方に、ビッ！と人差し指を突き出した状態で向けてくる。

「チャンスって？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るというのなら、許してあげないこともなくってよ」

ーーー警戒、敵ＩＳ操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認。

「……そういうのはチャンスとは言わないな」

（……思い出せ。あの時の訓練を……）

「そう？残念ですわ。それならーーーー」

ーーー警告！敵ＩＳ射撃体制に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

「お別れですわね！」

キュインッ！耳につんざくような独特の音。それと同時に走った閃光が刹那、一夏の体をーーー

「なっ！？」

「ふぅ…。危ない危ない」

すり抜けた。

「い、い今何を！？」

ニヤッと笑って白式（びゃくしき）の装備を出す。それを見て

「……フィリップ先生の言う通りだったな…」

苦笑いで名称未設定の近接ブレード振る。

「ちゅ、中距離射撃型のわたくしに近距離格闘装備で挑もうだなんて……」

よけられた事に動揺しながらももう一度射撃をする。

「格好いいだろ？」

射撃、射撃射撃射撃。まさに弾雨の如き攻撃をよけ、何時の間にかセシリアの懐に入り、

「っ！しまっーー」

「おせぇっ！！」

近接ブレードを振るう。

ーーーバリアーダメージ４６。シールドエネルギー残量、５２１。

実体ダメージ、レベル低。

一夏がセシリアに一撃を与えた。

「～～～～～っ！！『ブルー・ティアーズ』！！」

セシリアは自分の周りに浮いている四つの自立機動兵器を呼び出した。

「行きなさいっ！」

命令を受けた『ブルー・ティアーズ』ーーービットは二機多角的な直線機動で接近し、一夏の上下に回ったそれらは先端が発光、レーザーを放ってくる。

「うおっ！？」

また一夏は危なげに躱す。

「もう一度っ！」

今度はセシリアはビット全部を使ってレーザーを放つ。だが、

「はぁっ！！」

放たれた四つのレーザーを近接ブレードで全て弾く。

「な、なななっ！？」

「……すっげ。レーザー斬っちゃったよ……」

一夏自身驚いていた。

「あ。そうだ、セシリア。お前に一個言いたい事があるんだ」

「……何ですの？」

セシリアは静かに怒っている。

「お前。弱いだろ　（笑）」

ブチィィィッ！！と静かな怒りが激しい怒りへと変わる。

「わたくしを怒らせた事を後悔なさいっ！！」

ビットを大きく広げ、《スターライトｍｋ？》を構えて

「さあ、踊りなさいっ！わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる鎮魂歌（レクイエム）でっ！！！！」

「はっ！！俺は生憎盆踊りしか踊れねぇよっ！」

一夏と翔太郎（フィリップ）のそれぞれの戦いが始まる。

第五話：「私はツンデレではないっ！！」ｂｙ篠ノ之　箒（後書き）

次が難しい…

第六話：「ああクソッタレ！！数が多いなぁ！」ｂｙ左　翔太郎（前書き）

バトルシーンは……難しい！！！！

第六話：「ああクソッタレ！！数が多いなぁ！」ｂｙ左　翔太郎

ＩＳ部品・武装製造工場「月巳」は日本で５０％のＩＳの部品や武装を製造している。

工場の中は白い空間と言ってもいいくらい真っ白で、ゴミは塵一つなく清潔というより無菌状態に近い。

だが、今は真っ白な空間は黒く汚れており、所々に火が燃え盛って見るも無残な光景になっていた。

「（……何なのよ、これはっ！）」

最近ＩＳ部隊《撫子（なでしこ）》に新しく配属された花桐（はなきり）　真美（まみ）は困惑していた。

花桐はとある会社の「企業代表」だった。企業代表とは簡単に言えば「動く広告」だ。そのため、企業代表は美人が多い。綺麗に見せるためエステやらダイエットやら涙ぐましい努力をしている。

それなら企業代表はかなり優遇されているのかと言うとそれは違う。

企業代表は「動く広告」以外に何の価値もないので、普通のＯＬと何ら変わりはない。給料も全く普通。

花桐は企業代表がこんなモノと知って愕然とした。出世街道まっしぐらだと思っていたのに、と。

じゃあ、花桐はどうしたか。お金を稼いで億万長者になるにはどうしたら、と。それで分かった。軍人になろうと。

花桐はＩＳ学園卒業生。ある程度の訓練は受けているし、男一人くらいなら簡単に倒す事はできる。

日本の軍人はＩＳ学園卒業生が圧倒的に多い。ＩＳ学園の生徒が何故軍に入るか？それは簡単なことで理由の一つは

「自分のＩＳが欲しい」であり、そして一番の理由は

「お金が欲しい」である。

女尊男卑の世界である今は、女性は金持ちになれば、大抵なことは金でしますことができてしまう。もちろん、そんなことを考えていない人もいる。

だが、そういった甘い考えを持っている花桐は

目の前にいる化物（ドーパント）を理解できていない。

『オイオイ！何なんだよこの体たらくッ！弱いっ、弱すぎるぜッ！！世界最強兵器じゃあねぇのかよＩＳってのはよぉ！！！』

５０体はいる鳥人間みたいな化物『バード・ドーパント』の一体が羽の光弾を放つ。

《撫子（なでしこ）》の隊員たちは避け、近接ブレードで弾いたりして光弾を凌ぐ。

「（何なの!?こいつら!?）」

花桐はますます困惑を深めた。

すでに《撫子（なでしこ）》たちは疲弊していて攻撃を防ぐので精一杯だった。

「（何で……?ＩＳは世界最強兵器なのに…、鳥人間みたいなヤツに負けているの?）」

こちらは１００人。あちらは半分の５０体。戦力差で言うなら、こちらが有利な筈なのに、

「（勝てない…!）」

普通なら、勝利の中から何を選ぶかだった。けど今は敗北の中から何を選ぶかにランクダウンしてしまった。

花桐は勝つことが出来ないと考えてしまった。

人間は自分が信じていたモノが壊れてしまったら、どうなるか。

「……あ……あ」

その場で呆然とする。

「花桐ッ!!」

仲間の一人がプライベートチャネルで花桐を呼ぶが、全く聞こえていない。

「あ、あああああああッ！！」

「っ！？花桐っ！？まて死ぬ気かっ！？」

自分を支えていた柱があっけなく壊れてしまった花桐は発狂してドーパントに突撃した。

「あああああああああああッ！！！」

ＩＳ《衣希花（いけばな）》の近接ブレード、《枝垂（しだれ）》を振るう。

『んなもん聞くかっ！！』

化物の手刀で名の通り枝のように折れてしまった。

『オラァッ！！』

零距離で光弾を食らい、地面に叩きつけられた。

シールドエネルギーはゼロになり、待機状態へと戻ってしまう。

「ガハッ！？」

ベキッと嫌な音がした。何処かの骨が折れたようだ。

『オイよぉ！ちったぁ頑張れや！……ハァ、聞こえねぇか。これだから女は』

聞こえてはいる。だが、話すことが出来ない。意識を保つことで精一杯だった。

『……まぁ、いいや。あの世にでも行って休んでこいやぁッ！！』

鋭い鉤爪が花桐を襲う。

視界の端で、仲間がこっちにくるのが見える。だが、間に合いそうもない。

『死ねぇぇぇぇぇっ！！』

私はこんな簡単に死ぬのか。走馬灯も見ず、自分のしたいことも出来ず。

私は来るであろう衝撃に目を瞑った。だが、衝撃は私ではなく

『『ジョーカーエクストリーム！！　ハァッ！！』』

化物は強力な蹴りで吹き飛ばされ、爆発した。

煙が晴れ、そこにいたのは倒れている男と壊れたＵＳＢメモリがあった。

私はその怪物を倒した人物を見る。

緑と黒の体。マフラーをたなびかせ、この場に悠々立っていた。

『大丈夫か？』

「……殆ど大丈夫じゃないです。骨も何本かイッていますし…」

掠れ声で呟く。

『翔太郎。この人を安全な所へ』

さっきとは違う声が聞こえる。

『何だテメェはッ！！』

違う化物がこちらに向かってくる

《ヒート》

《ヒート・ジョーカー》

緑の部分が赤に変わる

『ハァッ！！』

『なっ！？グハッ！！』

拳から炎が出て化物を殴る。

『俺たちは仮面ライダーW（ダブル）』

『『さあ！お前達の罪を数えろ！！』』

私はその言葉を聞きながら意識が闇へと堕ちていった。

「翔太郎さん！助かりました！ーーーおい雪目（ゆきめ）、秋穂（あきほ）！花桐を安全な所に運べ！」

白並はこっちに近づきながら、仲間に指示を送る。

『すまない。遅れてしまった』

「いえ。グットタイミングですよ。貴方が来てくれなかったら……花桐は死んでいましたから」

最後のほうは悔やむように呟く。

『悔やんでいても仕方ない。今は戦おう。』

《ルナ》

『とりあえず花桐さんとやらの仇をとりゃあいい！』

《トリガー》

《ルナ・トリガー》

射撃特化形態「ルナトリガー」に変わり、「トリガーマグナム」で一気に大量の光弾を放つ。

ドーパントたちは避けようするが

『バンッ！…ってな』

『なっ！？』

光弾が曲がり、全て命中した。

「よし！効いてる！第一から第三までは敵を逃がさないように周りを囲め！それから残りは私と翔太郎さんに続け！！」

「「「「「「了解っ！！」」」」」」

ドーパントたちの周りを囲む。

『ウジャウジャたくさんいやがって！鬱陶しいんだよっ！』

囲まれたドーパントたちに光弾を次々に放っていく。

「結女(ゆめ)！翔太郎さんを全力でサポートしろっ！いいか、一撃も当てさせるなよっ！」

「了解っ！」

結女はドーパントを退けながら、進んでいく。

『ああクソッタレ！！数が多いなぁ！』

『メモリブレイクをしたいが……トリガーでは範囲が大きいから味方も巻き込んでしまう。だからと言って他のメモリでも…』

ドーパントの攻撃を避けながら、トリガーマグナムで光弾を放っていく。

『キエェェエェェッ！！』

『ッ！？』

「ハアァァッ！！」

結女は翔太郎の後ろから迫ってきたドーパントの攻撃を割って防ぐ。

『すまねぇ。えと「結女です」結女さん』

『一緒に戦ってくれるかい？』

「ええ。始めからそのつもりです」

近接ブレード『枝垂（しだれ）』を構える。

『それから少し頼みがある』

「？頼『余裕こいてんじゃねぇっ！』っぐ！。ーーみですか？」

フィリップは結女に耳打ちをする。

「ーーーー本当ですか？」

『ああ。だが、上手くいくかは分からないけどね』

「……まさかこのわたくしが極東の猿相手に翻弄されるなんて思っても見ませんでしたわ」

戦いはじめて約４０分が経過した。

セシリア・オルコットにとって織斑一夏はただの的でしかなかった。

ただの的だったことにだけに、今の状況は信じられないモノだった。

「ああ。自分でもビックリだな」

おどける感じに言う一夏は名称未設定の近接ブレードを肩に置き、セシリアの方を睨みつけていた。

「（……これが、一週間前までズブの素人だったというのかしら。この実力、代表候補並のレベル…！）」

セシリアは驚かずはいられなかった。

それに対して一夏は冷静だった。何故なら

「（……当然いえば当然だけど…やっぱり千冬姉のほうが強いな）」

世界最強と代表候補では天と地ほどの実力に差がある。

一夏のＩＳ実戦訓練は千冬が担当しており、その訓練を見ていた山田先生曰く「織斑くんを殺す気ですかっ！？」だそうだ。

「（……あっやべ。思い出したら体の震えが……）」

あの時の恐怖が蘇ってきて震え出す一夏。

「？どうしたんでしょうか織斑くん。体が震えているような……？」

ピットでリアルタイムモニターを見ていた山田先生が疑問混じりに

呟く。誰から見ても一夏は何かに怯えているように震えていた。

「ふん。どうせ今ごろ『戦いへの恐怖』とやらが出て来たのだろう」

震えの原因がそんな事を言った。言うなよ。

「そうですか…？それにしてもすごいですねぇ、織斑くん」

「当たり前だ。この私が指導したのだからな」

しかし、千冬は忌々しげな顔をする。

「あの馬鹿者。浮かれているな」

「えっ？どうしてわかるんですか？」

「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。あれは、あいつの昔からのクセだ。あれが出ているときは、大抵簡単なミスをする」

「へぇぇぇ……。流石ご姉弟ですねー。そんな細かいことまでわかるなんて」

なんとなくそう言った山田先生に、千冬はハッとする

「ま、まあ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな……」

「あー。照れてるんですかー？照れてるんですねー？」

「……」

「いたたたたっ！！」

千冬のヘッドロックが炸裂した。

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「はっ、はいっ！わかりました！わかりましたから、離しーーーあううううっ！」

ぎゃあぎゃあと騒ぐ山田先生を気にもかけていない様子で、箒はずっとモニターを見つめていた。

「（……一夏が勝っている。勝っているのに、なんだこの違和感は？）」

何故だか、違和感があった。何故かは分からない。

「……一夏」

大切な人の名を違和感を拭うように呼ぶ。

だが、違和感は消えない。

《メタル》

《ルナ・メタル》

トリガーからメタルにメモリチェンジし「メタルシャフト」構え応戦するW（ダブル）。

『では、よろしく頼むよ』

「はい！分かりました！」

結女は後ろへと下がる。

『『『キエェェェェェッ！！』』』

三体のドーパントがこちらに突っ込んでくる。

《メタル　マキシマムドライブ》

メタルシャフトを振り回す。すると黄色のリングが無数に出てくる。

『『メタルイリュージョン！！』』

無数のリングがドーパントに次々と当たって爆発した。

『よしっ！次もドンドン行くぜっ！』

『結女さん！』

「はいっ！行きましょう！準備は整いました！」

『流石だね。準備が速い。こちらも準備しなければ』

《ヒート》

《ヒート・メタル》

ヒートメタルにチェンジして結女のＩＳの肩部分に乗る。

「行きますっ！隊長、しっかりやってくださいねっ！」

「誰に向かって言っているっ！？出来るに決まっているだろうがっ！！ーーー発射、用意っ！！」

ドーパント達を囲んで戦っていた隊員達がレールガンを構える。

「撃てーっ！！！」

一斉にレールガンを放つ。だが、レールガンですらドーパントには効かない。なら何故レールガンを撃ったのか？それは目眩ましをする為だ。

『今だっ！』

翔太郎が結女に指示をする

「はいっ！ハアアッ！！」

結女は『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』を使った。瞬時加速（イグニッション・ブースト）とは後部スラスター翼からエネルギーを放出、それを内部に一度取り込み、圧縮して放出する。その際に得られる慣性エネルギーを利用して爆発的に加速するのが、瞬時加速（イグニッション・ブースト）である。だが、結女は

「ぐっ！」

瞬時加速（イグニッション・ブースト）をした瞬間、急ブレーキをかけた。当然瞬時加速（イグニッション・ブースト）の途中でブレーキをかければ、Gがかかる。ダメージを受ける。

それならその上に乗っていたモノはどうなるか？

『『だァァあああああああああああああッ！！』』

何倍ものスピードでドーパントのほうへと吹っ飛ぶのだ。

《メタル　マキシマムドライブ》

メタルシャフトが炎に包まれる。

『『うおおおッ！メタルブランディング！！』』

ズドンッ！！！！と

直後、大爆発が起きた。

あれだけの数のドーパントをメモリブレイクすれば当たり前のことだ。

次々と上からメモブレイクされた人が落ちてくるのを《撫子（なでしこ）》の隊員が受け止める。それでW（ダブル）はというと、

『うぇ……気持ち悪い…』

かなりの慣性Gを食らった為にヤバイ状態になっている。

「やりましたね翔太郎さん！すごいですねっ！まさかあんな事をやるなんて！」

バンバン！とW背中を叩く結女さん

『ぐえっ。や、やめて…は…吐きそう…』

ドーパント達を倒せたのが嬉しいのか、背中を叩き続ける結女さん。

「流石は翔太郎さん！やっぱ強いっ！』

『ぐぶぇッ！？』

今度は白並さん叩かれる。

そんな感じで勝利の余韻に浸っていたのもつかの間、

『く……クッソがァ…！』

まだ一体ドーパントが残っていた。

『チッ。一体だけメモリブレイクし損ねたか』

「だが、もう……」

逃げ場ない。言葉にしなくても、状況がそれを表していた。だが、

『……クソ、クソクソクソッ！！なんでこんな事になったんだっ！？「あの人」に言われたことをとっとと実行してりゃあ良かったのによぉ……ッ！』

『……「あの人」？一人で何ブツブツ言ってんだ？』

何か独り言を呟いていた。そして何故かその男は変身を解いた。

「……なんだ？負けを認めたのか？」

隊員の一人がそう呟いた。

「……もうどうしようもねぇ…。俺の人生は終わりだ…。だからもう……何やっちまってもいいよな……」

何かが壊れたように笑ってポケットから何かを取り出す。

『あれはっ！？』

「……何かのカートリッジ？」

『っ！。ヤベぇッ！？アイツを止めろぉぉっ！！』

何かに焦って走り出すW（ダブル）。

取り出したカートリッジをガイアメモリに取り付ける。

《バード　アップグレード》

そんな音声が鳴り響く。そして

『ギェェェエエッ！！』

巨大な怪鳥が現れ、大きな翼を羽ばたかせた。

『うおっ！？』

「キャアアアッ！？」

走っていたW（ダブル）は後ろへ吹き飛ばされ、《撫子（なでしこ）》達は風で後退させられた。

「な、なんだ。あれはっ！？」

『あれはガイアメモリ強化アダプタで進化したドーパントだっ！さっきより強いから気をつけろっ！！』

「チィッ！！。総員、バケモノを囲めぇッ！！」

『ギェェエエエエエエエエエッ！！』

周りを囲もうとするが、響き渡る鳴き声で動きが止まってしまう。

そしてバードドーパントは翼を拡げ、飛びW（ダブル）を足で捕まえる。

『うおっ！？テ、テメェ、離しやがれっ！』

工場から飛び出てしまう。

「翔太郎さん！？追いかけるぞ！」

『撫子（なでしこ）』達はドーパントを追いかける。

「……一体どこに向かっているんだ？」

ドーパントの向かっている場所は

「では、そろそろ閉幕（フィナーレ）と参りましょう」

「ああ。お前の負けでな」

「……減らず口をッ！！」

二つのビットを動かし、二つのビットは一夏の上下に回せる。

一夏の上下に回ったそれらのビットの先端が発光、レーザーを放ってくる。それを防御、あるいは回避すると、その隙にセシリアのライフルが突いてくる。

「くっ……！」

「左足、いただきますわ」

「チィッ……！」

この距離では回避することが出来ない。

「（……なら。一か八かだっ！）」

ガギンッ！と派手な音と一瞬の火花。

「なっ……！？」

一夏は無理矢理な加速で、セシリアのライフルの銃身に正面からぶつかった。

「無茶苦茶しますわね。けれど、無駄な足掻きっ！」

ビットとライフルで一夏を追い詰める。だが、一夏は

「ーーーよし。わかったぞ」

ニヤリと笑って、穿たれるレーザーをくぐり抜け、一閃。

「なんですって!?」

真っ二つにされたビット1をみて、驚愕するセシリアに向けて、一夏はブレードを下から斬り込む。

「くっ……！」

後ろに下がるセシリア。そして二つのビット2と3が飛んでくる。

「この兵器は毎回お前が命令を送らないと動かない！しかもーーーー」

一夏はビットの軌道を先読みし、ビット2の後部　推進器（スラスター）を破壊して落とす。

「その時、お前はそれ以外の攻撃ができない！制御に意識を集中させているからだ。そうだろ！」

「……！」

ひくくっとセシリアの右目尻が引きつった。どうやら図星のようだ。

「（……これで勝てる！）」

セシリアの間合いに入った一夏は、振り下ろしたブレードでビット３を破壊。そのままＩＳ独自の無重力機動でビット４を回し蹴りで吹き飛ばした。

ーーー獲った！

一夏は勝利を確信した。ライフルの砲口は間に合わない。確実に一撃が入るタイミングだった。だが、

「ーーーーまさか、こんな簡単な罠にかかるとは思いませんでしたわ」

ニヤリ、とセシリアは笑った。

セシリアは激情したと見せかけて、一夏の動きを観察していた。これでもイギリス代表候補だ。自分の弱点くらい知っている。

セシリアは自分のビットを利用して一夏を有利になるようにしたのだ。どんな状況でも戦局を自由に変えることが出来なければ、代表候補にはなれない。

一夏は危険を感じて距離を置こうとするが、間に合わず、

ヴンッーーー

とセシリアの腰部から広がるスカート状のアーマー。その突起が外れて、動いた。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズには六機ありますのよ！」

回避が出来ない。しかも、さっきまでのレーザー射撃を行うビットではない。これは

『弾道型（ミサイル）』だった。

ドガァァァンッ！！

赤を超えて白い、その爆発と光に一夏は包まれた。

第六話：「ああクソッタレ！！数が多いなぁ！」ｂｙ左　翔太郎（後書き）

くじけそうです……

第七話：「天災の束さん、参☆上！」ｂｙ篠ノ之束（前書き）

出来ました！

第七話：「天災の束さん、参☆上！」ｂｙ篠ノ之束

「一夏っ……！」

モニターを見つめていた箒は、思わず声を上げた。
さっきまで騒いでいた千冬と山田先生も、爆発の黒煙に埋まった画面を真剣な面持ちで注視している。

「ーーーーふん」

黒煙が晴れたとき、千冬は鼻を鳴らした。けれど、どこかその顔には安堵の色があった。

「機体に救われたな、馬鹿者め」

まだかすかに漂っていた煙が、弾けるように吹き飛ばされる。そしてその中心には、あの機体が純白の機体があった。そう、

真の姿でーーーー。

ーーーフォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください。

「（……な、なんだ？）」

一夏の意識に直接にデータが送られてくる。と同時に、目の前に現れるウィンドウ。その真ん中には「確認」と表示された。訳もわからずそれを押すと、さらなる膨大なデータが流れ込んでくる。正確には整理されているのだ。

一夏はそれが感覚的にわかる。そして、変化は劇的に訪れた。

「これは……」

「ま、まさか……一次移行（ファーストシフト）!?あ、あなた、今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの!?」

新しく形成されたＩＳ装甲はまだうすぼんやりと光を放っていた。それまでの機体ダメージがすべて消え去っており、それどころかより洗練された形へと変化していた。

「（……なるほどね）」

さっきのウィンドウに『初期化（フォーマット）』と『最適化（フィッティング）』が終了したと言うことは

「……これでやっと、俺専用になったって事か！」

一夏は改めて機体を見てみると、最初の工業的な凹凸は消えて、滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的などこか中世の鎧を思わせ

るデザインに変わっていた。そして何より変わったのは

ーーー近接ブレード・《雪片弐型（ゆきひらにのかた）》

ーーー雪片（ゆきひら）。それは、かつて千冬が振るっていたＩＳ装備の名称。
刀に型成（かたな）した形名（かたな）。それが雪片（ゆきひら）。

「……ああ、まったく…。俺は世界で最高の姐さんを持ったよ」

一夏は思う。
三年前も、
六年前も、
そしておそらく十五年前も。

あの人はいつでも俺の姉だ。

でもそろそろ、守られるだけの関係は終わりにしよう。

これからはーーーー

「俺も、俺の家族を守る」

「……は？あなた、何を言ってーーー」

「とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ！」

元日本代表の、その弟。それが不出来では、格好が付かない。そう、あの世界最強が格好付かないなんて、冗談もいいところである。しかも笑えない。

「さっきからなに意味不明なことを……ああもう、面倒ですわ！」

『弾道型（ミサイル）』を再装填したビットがニ機、セシリアの命令で飛んでくる。またあの多角的直線機動だ。しかも射撃型ビットより速い。だが、

「（……見える！）」

一夏は右手を握りしめる。それに応えるように低い機械音を鳴らす《雪片（ゆきひら）》。

ザンッッ！！

と一夏に横一閃されて両断したビットは、慣性のまま一夏の横を通り過ぎ、爆ぜた。

一夏は再度セシリアに突撃する。機体の瞬間加速度、センサー解像度はさっきの比じゃない。

「（……いける！）」

右手の中でエネルギーがその密度が増していくのを一夏は感じた。

刹那、雪片（ゆきひら）の刀身が光を帯び、より強い力の存在が伝わってきた。

「トドメだッ！！」

セシリアの懐に飛び込んだ一夏は、下段から上段への逆袈裟払いを放つ。

誰もが一夏の勝利を確信していた。していたからこそ

『ギェェエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエッ！！！！』

『『うおおおおおおおおおおおおっ！？』』

アリーナのシールドバリアーを突き破って化物と仮面ライダーが降ってくるなど思いもしなかった。

ズガァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァンッ！！！！

アリーナのシールドを突き破り、地面へと激突したドーパント。だが、何もなかったかのようにダメージもなく起き上がる。

『ギェェェエエエエエエエエエッ！！』

「な、なんだ？」

「な、何ですの、あ、あれは…？」

突然現れた侵入者（イレギュラー）に戸惑う二人。

「こ、ここは……ＩＳ学園……か？」

地面に衝突し、変身を解かれた翔太郎は起き上がって痛む体で今の状況を確認する。

『ギェェエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエッ！！』

ドーパントがこちらに気が付いて近づいて来る。

「チッ…！」

翔太郎は変身しようとするが、手元にはなく少し離れた所にダブルドライバーとジョーカーメモリがあった。おそらく落ちた衝撃で跳んだのだろう。

翔太郎はドーパントの攻撃を全力で転がって回避し、ダブルドライバーとジョーカーメモリを手に取るが

「壊れてやがる……っ！」

ダブルドライバーは半分くらい壊れていた。ジョーカーメモリを無事だったが、これでは変身出来ない。

『ギェェエエエエエエエエエエエエエエッ！！』

ドーパントが襲いかかってくるが、一夏が《雪片（ゆきひら）》で弾く。

「セシリア！！」

「わかっていますわっ！」

二機のビットでミサイルを放ち、スターライトｍｋ？で次々とレーザーを放つ。

「大丈夫か翔太郎！」

「ああ助かったぜ一夏」

「あれは一体なんですの？」

セシリアが指の代わりにスターライトｍｋ？で示す。

翔太郎は少し言い淀んで

「……あれはドーパントというバケモノだ。お前達じゃあ、あれは倒せない」

「は？何を言っているんですの。ＩＳは世界最強兵器。それにこのわたくし、セシリア・オルコットが負ける……はずがありませんわ！」

セシリアは一夏に負けそうになった事を思い出して言葉を止めたが、なかった事にされた。

「翔太郎！《ファングジョーカー》で行くしかーーっ！？」

駆け寄ってきたフィリップは翔太郎が持っている壊れたドライバーを見て口を噤んだ。

『ギェェエエエエエエエエエエエエエエエエエエエッ！！！』

「来ましたわ！」
「まずは俺がっ！」

「っ！？やめるんだ二人共！」

フィリップの静止も聴かず、一夏がドーパントに突っ込んでいき、セシリアはスターライトｍｋ？構える。

「うおおおおおっ！！」

一夏が《雪片（ゆきひら）》を大きく振るい、一息でドーパントの体をすれ違いざまに斬る。

「落ちなさいっ！！」

セシリアはドーパントに両翼、両足、そして頭にそれぞれ、計５０発レーザーを放つ。
ドーパントは叫びながら砂煙をあげながら地面へと落ちる。

「何だよ翔太郎。簡単に倒せるじゃないか」

「ＩＳでも倒せないなどあり得ませんわ」

二人は拍子抜けだと言わんばかりに笑っていた。だが、

「逃、げろ……」

翔太郎はこれから起きる事が想像できた。いや想像できてしまった。

「逃げろォォォおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！」

直後、

ボッ！！！！と地面に倒れているドーパントの体が光り、全身から大量の羽根の光弾を放った。

「がァァァあああああああああああああああッ！？」

「きゃあああああああああああああっ！？」

一番近くにいた一夏は大量の光弾をモロに食らってしまった。セシリアも一夏ほどではないが、光弾を食らい、二人は一気にシールドエネルギーがゼロになってしまう。

「一夏っ！！」

「マズイッ！このままでは二人がっ！」

「くそっ！！フィリップはセシリアを。俺は一夏を！」

「分かった！来い『ファング』！」

ギャオオオオッ！！　と何処からともなく恐竜の鳴き声がし、突然ドーパントが小さい何かに横転させられる。

《ギャオオオオッ！》

恐竜の形をした、W（ダブル）第七のメモリ「ファングメモリ」は小さいながらも巨大なドーパントを圧倒していた。

「じゃあ俺もだ！」

《スタッグ》
《バット》
《デンデン》
《フロッグ》
《スパイダー》

翔太郎は全ての「メモリガジェット」使ってドーパントを足止めをする。そして倒れている一夏に駆け寄る

「ケガは……思ったよりは無いな」

一夏を抱えてその場からはなれようとするが、足止めしていたメモリガジェット達を蹴散らしたドーパントがこちらに向かってくる。だが、横合いから何かが飛び出してきて、ドーパントの動きを封じた。

「大丈夫ですか、翔太郎さん！」

「白並さん！それに《撫子（なでしこ）》も！」

「コイツは私達が！だから早くその二人は安全な所へ！」

翔太郎は一夏抱えて直して、セシリアを抱えているフィリップと合流し、できるだけドーパントと離れた場所に逃げる。

そこに箒と千冬と山田先生とセシリアのメイド、チェルシーが駆け寄る。

「一夏っ！！」

「織斑っ！」

「織斑くんっ！オルコットさんっ！」

「お嬢様っ！！」

「安心したまえ。気絶しているだけだ」

「分かった。ーーー山田くん。今すぐ医療班に連絡だ。それとＩＳ

教師部隊とこの学園の専用機持ちを全て招集しろ。バケモノのせん
「それはやめたほうがいい」……何故だ？」

フィリップが指示をしている千冬に割り込みをかける。

「あのバケモノ……ＩＳではドーパントには勝てない。それはさっき見ていただろう」

「……なるほど、お前達はあのドーパントとかいうバケモノを知っているみたいだな」

「「……」」

沈黙する二人。

「織斑先生。医療班、来ました」

「……分かった。二人を保健室へ運んでくれ」

わかりましたと医療班は一夏とセシリアを担架に乗せて保健室へと運んでいった。千冬は運ばれていく二人を見て、そして前にいるフィリップ、翔太郎の方を見る。

「ーーーさて、話して貰おうか」

拒否権はない、と。

二人は全ての経緯を話した。

「……政府の依頼、ガイアメモリ、そして仮面ライダー……か」
「政府の依頼、ですか……」
「仮面ライダー…？」
「……」
千冬、山田、箒、チェルシー、それぞれが違う反応した。

「さっきも言ったようにＩＳではドーパントは倒せない。倒すには僕達、仮面ライダーのメモリブレイクでしか倒せない。だが……」
「変身に必要なダブルドライバーが壊れて変身が出来ない……そうだろ？左、フィリップ」

「……ああ。そうだ」

翔太郎はドーパントと戦っている《撫子（なでしこ）》を見る。明らかに不利な状況だった。数の上では《撫子（なでしこ）》が有利だ。だが、ドーパントは強さの質が違っていた。
簡単に言えば、最悪なのだ。

「クソが……っ！！」

皆がみんな、見ているしかなかった。ＩＳではドーパントは倒せない。既に状況が整っていた。最悪の道（ルート）が。

誰もが諦めていた。翔太郎も、フィリップも、山田先生も、箒も、そしてあの千冬も。

だからこそ、

ーーーこんな時こそ、この天災の束さんの出番なのだ～～！！！☆

最悪には最悪（天災）をぶつけてしまえばいい。

一夏は保健室で寝ていた。だが体の痛みで目を覚ました。

「……知らない天井だ」

この台詞一度言って見たかったんだよなと呟いて一夏はベッドから起き上がる。

「……調子乗っていたんだな、俺は」

あのバケモノと戦って、そう思った。

力（白式）を手に入れたから
家族を守れる力を手に入れたから
勝てると思った。けど

「思い上がりも甚だしいよな、ホント」

一夏は何故か笑っていた。
普通なら悔しい筈なのに、凄く晴れ晴れとしていた。

「……さて、行きますか」

痛む体にムチをいれてベッドから降りて、保健室を出ようとする。

「……何処に行くつもりですの？」

「うん？あ、起きたのかセシリア」

同じく保健室で寝ていたセシリアが一夏を止める。

「……何処に行くつもりですの？」

「何処って……、あのバケモノの所にいくんだけど」

セシリアは膝を抱えて俯いており、表情が見えない。

「……それがどういう意味か分かって言っているんですの？」

「ああ。分かってるけど？」

「分かっていませんわっ！！」

セシリアは激昂した。

「貴方は本当分かっていませんわっ！！あのバケモノは……信じたくはありませんが、世界最強兵器であるＩＳを一撃で倒せるほどの力をもっているんですのよっ！？」

セシリアは一夏に詰め寄る。

「分かってるよ。それぐらい」

「嘘ですわっ！分かっているなら、そもそもあのバケモノの所に行きませんわっ！あんなバケモノを倒すの無理ですわっ！！」

セシリアは泣いていた。自分が信じていたものが、力が、夢や、目標が崩れていくかのように。

そんなセシリアを一夏は頭に手を置いて

「確かに俺は分かっていないかもしれないし嘘かもしれない。無理かもしれない。けどな、セシリア。そうじゃないんだよ。分かってないとか、嘘とか、無理とか、そんな問題じゃないんだ。本当の問題は「やる」か「やらない」かなんだ。どんなにケガしていようが関係ない」

一夏は一拍置いて

「俺はどんな手を使っても全てを守る。両腕無くなれば、両足使って守る。両足無くなれば、頭を使って守る。それでも駄目なら守護

霊にでもなって守る」

笑いながらセシリアを頭を撫でながらそう言った。セシリアは驚いた表情をしていた。

「……少し聞いてよろしいですか？」

「？何だ」

「貴方は、何の為に戦うのですか？」

セシリアは一夏をまっすぐ見て、答えを待つ。

「ンなもん、決まってんだろ？」

一夏は笑って

「自分（みんな）の為だよ」

「久しぶりだＺＥ☆！ちーちゃん！箒ちゃん！そして会いたかったＺＯ☆！フィーくん！しょーくん！皆のアイドル、篠ノ之束だよ～

！！☆☆☆」

いきなりの登場についていけず、アリーナにいる全ての人が、口をあんぐりと開けていた。
この人がどうやって登場したかというと翔太郎達が何も出来ずに無力感を感じていた時、突然上からものすごいスピードでドーパント目掛けて何かが落ちてきた。それは

「「「「「「「「「……ニンジン？」」」」」」」」」

そのニンジン？が縦に開き、そして出てきたのは

「フハハハハハハッ！！天災の束さん、参☆上！」

某時を駆ける仮面ライダーのポーズを決めたのだった。

「束っていやぁ……」

「ＩＳ開発者の篠ノ之束……まさかこんな所で会えるとは！」

目を子供の様にキラキラ光らせて興奮気味のフィリップ。
束はウサギの様にピョンピョンと跳びながらコッチに来る。

「束！今お前に構っている暇はない。帰れ」

「姉さん……」

「え、えええええっ！？束って、あのっ！？」

「……びっくりです」

千冬はキレて、箒は呆れており、山田先生は大袈裟に驚いて、チェルシーは普通だった。

「ちょ、ちょっと待ってよ～！折角登場したのに即刻退場！？」

「「帰れ」」

さっきまでシリアスな感じだったのに、ギャク的展開になってしまったようだ。

「ま、待ちたまえ。篠ノ之束も何も、ふざけて来ているわけじゃないんだから」

「とりあえず、お、落ちつけ二人共」

フィリップと翔太郎が二人を宥める。

「わーい！フィーくんとしょーくんが助けてくれたー！そんな二人に束さんからプレゼントっ☆☆☆」

束が二人に少し大きい箱を渡す。その箱に入っていたのは

「「ダブルドライバー！？」」

ダブルドライバーと新しいメモリが六つ入っていた。

「どどど、どうして！？」

「フィーくんとしょーくんの為に作ったのだー！！褒めて褒めて？」

「まさか……これまで作るとは……篠ノ之束、ゾクゾクするねぇ」

「さあー！変身するのだっ！！」

「いくぜ、フィリップ！」

「ああ！翔太郎！」

《サイクロン》

《ジョーカー》

「「変身！！」」

《サイクロン・ジョーカー》

仮面ライダーW（ダブル）　サイクロンジョーカーに変身した翔太郎。

『とっとと終わらせるぜっ！』

「ちょっと待ったぁっ！！」

そのままドーパントの方に走り出そうとするが、束に止められる。

『な、何だよ。早く倒さねえと』

「新機能の事を説明をするから待たなきゃいけないんだよっ！」

『『新機能？』』

「ほい。これ」

束が二人に箱には入っていないメモリを渡す。

「これをメモリスロットに入れるのだっ！！」

何で？とW（ダブル）は疑問を持ったまま、メモリをスロットに入れる。

《インフィニット・ストラトス　マキシマム　ドライブ》

電子音声が響き、W（ダブル）光に包まれる。

『な、なんだなんだっ？』

キィィィィィン……。高周波な金属音が響いていく。そこにいたのは

「ＩＳ……？」

「成功ーー！！！！！これが新機能、『インフィニット・ライダーシステム』だーーー！！！！！」

そこにはＩＳを纏ったＷ（ダブル）がいた。

『何じゃこれはーーっ！！？？』

「束さんのＩＳとガイアメモリを合体させたのだっ！！普通はＩＳは女性しか動かせないけど、ガイアメモリをコアの代わりにしてみたら、こんな事になっちゃった～よ？束さんビックリっ！！」

束の説明を聞いた全員がその事実に唖然とする。束は指を鳴らすと周囲に光の粒子が集まり何かが姿を現した。前腕部だけのパーツが浮いていて、それが左右二対で見た目もサイズも、ＩＳのアームアーマーに似ていた。

『これは貴女のＩＳかい？』

「違うよ、フィーくん。これは私の移動型ラボなんだよ。ちなみに『吾輩は猫である（名前はまだ無い）』

束はそう説明すると、空中投影ディスプレイを展開する。

「さあ！しょーくんフィーくん！今からフィッティングとパーソナライズとその他機能の調整をイッキにやっちゃおうかっ！私が補佐するからすぐに終わるよん♪」

空中投影ディスプレイのキーボードを凄い早さで叩いていく。

「基本は今までのＷ（ダブル）とあまり変わりないから気にしなくてもいいよ

～ただＩＳが引っ付いただけだから～。ｌーーはい、全て終了～。超速いね。さすが私」

すると、展開しているＩＳが変化し始めてＷ（ダブル）の体に合う大きさになった。

『よしっ！改めて行くぜっ！』

『ああ！篠ノ之束。感謝する』

Ｗ（ダブル）はもの凄い速度でドーパントの方へ飛翔した。

「……チッ！何やってんだ。折角貴重なガイアメモリ強化アダプタをくれてやったのに……カスだな」

その男はアリーナの様子を伺っていた。しかも上空で、だ。

「仮面ライダーがいるのは許容範囲だが、まさかあの篠ノ之束が出てくるなんて……メンドクサッ」

溜息をつきながら様子を見ているとケータイのバイブが鳴る。

「はあい。……何だ『U（ユー）』さんか。どうかしましたか？…えっ？帰って来いって？分かりましたー」

ケータイを閉じてポケットに入れて、逆に「N」と書かれたメモリを取り出す。

「さて、帰りますか」

腰に装着されている「ガイアドライバー」を見て、メモリを入れる。

《ナスカ》

と電子音が響き、異形の姿に変わる。

『じゃ。後始末ヨロシク♪仮面ライダーさん』

そう言ってその場から消えた。

第七話：「天災の束さん、参☆上！」ｂｙ篠ノ之束（後書き）

次でクラス代表決定戦は終わり……にしたいです。

第八話：「済まない。待たせたね」ｂｙフィリップ（前書き）

遅くなりました。

第八話：「済まない。待たせたね」ｂｙフィリップ

「…さっきより面倒くさい事になってるわねっ」

「それ同感っ！まったく攻撃が効いて、ないっ！！」

《撫子（なでしこ）》の山中（やまなか）　秋穂（あきほ）は中距離武装《風花（かぜはな）》をドーパントに連射しながらそう独り言を呟いたのだが、仲間の一人涼風（すずかぜ）　雪目（ゆきめ）が《枝垂（しだれ）》で光弾を弾きながら答えた。

「ていうか、これ現実？ドーパントだっけあれ。ここ絶対漫画や小説の世界でしょ」

「……鋭いわね」

戦っているのに緊張感のない話しをしているとドーパントが咆哮あげながら雪目達に突っ込んできた。

「っ！アンタと無駄話してたせいで敵さんがコッチにきたじゃないっ！」

「ちょっ！？話しかけてきた秋穂が悪いんでしょ！人のせいにしないで！」

「あれはただの独り言っ！！」

秋穂と雪目は《風花》を連射しながら二手に別れる。

雪目が《枝垂（しだれ）》を展開し、ドーパントが放った光弾を弾き返して動

きを鈍くし、秋穂は《風花》で防御の薄い場所を狙う。が、

「……まったく効いてないわね」

「……ホント萎える」

無傷のままだった。ドーパントはそれを示すかのように翼を大きく拡げ、咆哮する。ＩＳは世界最強兵器と言った奴は少し表に出ろと言いたい所である。

「くそー！誰だ『ＩＳは世界最強兵器だからどんな兵器にも負けません。核兵器？何それ？食えるの？』って言ったヤツ！私が力いっぱいぶん殴ってやるっ！」

「生きているなら神様だって殺してみせるっ！」

ちゃんと戦えやコラァ！！と白並達からのオープンチャネルを無視して愚痴り始めるが、段々と関係のない事を愚痴り始めた。

「小説って書くの意外に難しいねって前この作者が言ったよ」

「当たり前でしょ。小説舐めてんじゃないの作者は。バカなの？死ぬの？」

「しょうがないわ。この間作者が「ヤッベー。アイディア浮かばねえ…！！関係ないけど天使ちゃんマジ天使！！」って言ってるクソで間抜けの大バカ野郎なのだからね」

「やめてあげて下さいっ！作者のライフは既にゼロですっ！？」

聞いていた結女は悲痛な叫びで二人を止める。二人は作者の愚痴りをやめて、ＩＳのことについて話し始めた。

「ＩＳは世界最強兵器って言われているけどさあ、『最強』って結構穴がある単語なのよね～」

「そうそう。核兵器を食らってもエネルギーシールドが操縦者を守ってくれる。けど、ＩＳを起動してなきゃ意味ないよね。例えば暗殺とか」

あーやだやだ。と首を振る二人。

「そういうのから自分の身を守るために私達ＩＳ操縦者は軍人みたいな訓練をするけど。『最強』ってのはさ、「最も強い」なんだよね」

「「最も強い」だなんて、なんか微妙なのよね。ＩＳは「兵器の中で最も強い」だよね」

ねー。と頷きあう二人。秋穂が何かを思い出すかのように話す。

「確かある小説で「本体だけで全長五十メートル、砲の長さまで含めればそれ以上のサイズを誇る兵器は登場と共にこれまであった戦争の常識を全て塗り替えてしまった」という一文があるの。まるで今の私達の世界みたいね。世界最強と言われ、人なんか蟻のように蹴散らすことの出来る超巨大兵器。けどこの小説だと、その超巨大兵器は軍人二人に木っ端微塵に破壊されてしまう。その二人はスーパーマンだとか、特殊な能力だとか持っているわけじゃない。じゃあ何故破壊出来たと思う？それは「それを倒せるかもしれない知識をもっているから」なのよね」

秋穂はドヤ顔でそう言った。

「確かにそうね。知識が無ければ何も出来ないし。喋る事も、食べる事も、動く事も、全て。『最強』にも弱点があるのよね。そこを突けば、簡単に崩す事が出来ちゃうしね」

ていうかそのドヤ顔ヤメレ。と露骨に嫌な顔をして言う。

「とりあえず何が言いたいのかというと、この世に『最強』なんて言葉ないし、当然『絶対』なんて言葉もない。あるのは『適材適所』という言葉しか存在しないの。ＩＳはドーパントには敵わない。ならどうすれば良いか？……まあ、簡単なことよね」

ビュンッ！！と雪目と秋穂の間を何かが通り過ぎる。通り過ぎたモノを見て二人はニヤッと笑い

「「さあ、ヒーローのご登場よ」」

ズガゴンッ！！とドーパントが横合いから何者かにぶっ飛ばされ壁に激突する。雪目達はわーと拍手しており、白並達は「それ」を見て驚愕していた。

『済まない。待たせたね』

『さっさと終わらせようぜっ！』

ＩＳを纏ったＷ（ダブル）「Ｉ Ｒ・Ｗ（インフィニットライダー・ダブル）」の姿。白並達は呆然とそれを見ていた。

だが、雪目と秋穂はそれほど驚いておらず、

「うっわ…。仮面ライダーにＩＳって……、最強じゃね？」

「ちょっと、さっきの私達の会話を台無しにしてんじゃ無いわよ」

「まあ良いじゃん良いじゃん。わっはっはっはー！」

「笑い事じゃねえわよ。私に謝罪しなさい」

「すいませんしたーっ！！この事はとっくの昔に忘れましたっ！」

バカな会話をしていた。

《メタル》

《サイクロン・メタル》

Ｗ（ダブル）はサイクロンメタルにメモリチェンジし、メタルシャフトを構える。

『行くぜっ！』

一気にドーパントに近づき風の波状攻撃を放つ。怯んだドーパントの懐に入りドーパントの休む暇すらなく、メタルシャフトを振るい続ける。

『次はこれだね』

《ルナ・メタル》

サイクロンからルナにメモリチェンジし、伸びるようになったメタルシャフトをドーパントの体に巻きつかせ、思い切っりぶん回して地面へと叩き落とした。

《トリガー》

『白並さん！全員一斉射撃っ！』

《ルナ・トリガー》

「分かりましたっ！総員、撃てぇ！」

ズガガガガガガガガッ！！！とW（ダブル）がトリガーマグナムを白並達が《風花》を連射する。ドーパントは土砂降りを受けたみたいに攻撃を喰らう。だが、

「あれだけのを受けたというのに……まだ動けるのか」

土砂降りのような攻撃を喰らってもドーパントは今だに健在だった。驚愕を通り越して呆れすら感じている白並達。

『おそらくこのドーパントは通常のマキシマムではメモリブレイクする事は出来ない』

「そうなんですかっ！？じゃあ一体どうすれば……！」

普通の方法では倒せないと知り、《撫子（なでしこ）》達に動揺が走る。だが、フィリップ達は

『だが、それは「通常」の場合だ。ちゃんと方法はある。それは……』

「そ、それは…？」

ゴクリと唾を飲み込む《撫子（なでしこ）》達。

『『ツインマキシマムだ』』

「流石だね～フィーくんしょーくん。もう使いこなしちゃってカッコイイっ！！」

束は空中投影ディスプレイのキーボードを叩きながら言う。ディスプレイには「ＩＳ・Ｗ」の起動状態が映し出されていた。

「おい。束」

「うーん？何～？」

「あれはお前の仕業か？」

千冬は今Ｗ（ダブル）が戦っているドーパントに指をさす。

「まっさか～。この束さんがあんなブサイクな鳥さん作らないよ。それに、ガイアメモリなんて中途半端な物触りたくないよ」

ドーパントを見て明らかな嫌悪感を見せる。どうやらガイアメモリに対して良く思ってはいなかった。

「じゃあ何故あいつ等…仮面ライダーに手を貸した？」

千冬は疑問に思った。ガイアメモリを使って変身する仮面ライダーは束にとっては『殲滅対象』であるはずだ。

「最初はどうでもよかったけど、途中から気になってきたんだよね～、正確にはしょーくんとフィーくんが」

にまにまと微笑む束。

「……ほう」

千冬は驚いた。あの束が私や一夏に箒以外に興味を持つとは思いもしなかった、と。

「だから二人のピンチに駆けつけたわけだＺＥ☆！それにーーー」

自分の表情を千冬達に見せないように背を向けて

「あの二人を”完成”させてみたいんだよねぇ…」

狂ったような笑顔でそう呟いた。

「あー。痛ってー。ムチャクチャ体が痛ぇ…。セシリアにあんなカッコいい事言うんじゃ無かった」

一夏は今誰もいない廊下を全身打撲の体で走っていた。本当ならカタツムリのように地面を這いずり回りたいが、そうもいかない。他の生徒は「突然の社会見学」として外へ出かけて（避難して）いる。だから今ＩＳ学園にいるのは、１．２．３年生の専用機持ちとＩＳ教師部隊しかいない。

「後、「白式（びゃくしき）」が何処にあるか探さないとな…」

専用機の「白式（びゃくしき）はいま手元にはない。寝ている間に回収されたのだろう。

一夏はＩＳ格納庫にきていた。ここに自分のＩＳがあると思っていたが、有ったのは「打鉄」と「ラファール・リヴァイヴ」しか無か

った。

「くそ。白式（びゃくしき）は何所に有るんだ…」

一夏は焦っていた。こうしているうちに翔太郎達がーーー

「君が来なくてももうすぐカタがつくわよ。織斑一夏クン？」

突然目の前が真っ暗になった。比喩ではない。

「だーれだ？」

後ろから聞こえた声は同級生よりも大人びいていた。楽しさがにじみ出ているような笑みを言葉に含んでいて、イタズラを楽しむ子供のような感じだった。

訳も分からず一夏は数秒間ぼーっとしていた。

「はい、時間切れ」

そう言って目隠しを解いた人物を確認しようと、一夏は振り向く。

「……誰だ？」

知らない女子だった。さっきのやりとりではそうとしか言いようがなかっただろう。

「君が行かなくても、事態はすぐに終わるから大人しくしてくれるかしら？」

事態が悪化しちゃうから。とニコッと笑う。その態度、目の前の女

子　（リボンの色が二年生だろうか？）の言い方に少しムッとくる。まるで自分が

「弱くて邪魔だから、事態を悪化させるのは良くないの」

思考を読まれてしまった一夏は驚くが、弱いと言われ憤りを露わにした。

「なっ…！お、俺はーー」

「強い？いいえ、君は弱いわ。確かにこの一週間国家代表候補生並に強くなったけど、あのドーパントに比べたら……いえ、この私と比べたらまだまだ弱いわ」

ニコニコと笑みを崩さず、一夏を責めるようにいう。もっている扇子を広げるとそこには「弱肉強食」と書かれていた。

「よ、弱い…？」

ストレートに言われ、慄く一夏。目の前の少女はパンッ！と扇子を閉じ、自信満々に

「ええ、弱いわ」

一夏は何も言えなかった。少女はポケットに手を入れてある物を取り出しだ。それは

「これ、なーんだ？」

「！！それは！」

少女が出したのは一夏の専用機「白式（びゃくしき）」の待機状態のガントレットだった。一夏はそれを取り返そうと動くが、避けられ一夏は勢い余ってころんでしまった。

「ダメでしょ。こんないたいけな少女奪おうだなんて、男の子なんだから女の子には優しくしないと」

メッ！と少女は一夏の頬を突ついた。その人をバカにした態度が癇に障ったのか、今度は足払いをして動きを止めようとするが、

「ふふっ。甘い甘い♪」

少女は後退して足払いを回避する。そして一夏の腕を持ち、立ち上がらせ背負い投げをした。

「がッ！？」

一夏は急いで立ち上がろうとするが、スッと刀の先を向けるように扇子を突き出す。

「王手♪」

そう言われた。反撃が出来ないように太腿が踏みつけられている。少女が一夏に諭す様に

「ねえ、一夏クン。何であのドーパントの所に行こうとするのかな？あの怪物には自分は敵わないって分かっているのに。自分が行かなくても事態はもうすぐ収まるって言うのに。何で？」

少女は笑みを崩さない。

「どうして？」

赤ちゃんをあやすかの様な声色で言った。一夏がどんな答えを出すのかをジッと待っている。

「自分（みんな）の為だ」

一夏は少女の腕を掴んで引き寄せる

「それ以上もそれ以下もない。ただそれだけだ」

一夏は殺すとばかりに睨みつける。少女はそれを見て、一夏から離れる。

「五十点かな」

「は？」

疑問を上げる一夏。何がなにやら全く分からない。すると少女は白式（びゃくしき）を渡す。

「え？え、えええぇ？」

「頑張ってねえ～」

と言って少女はその場から立ち去ってしまった。拍子抜けする一夏。

「……

……い、行こう」

たっぷり時間を使い、急いでアリーナへと走る。そしてここまで三点リーダを使ったのは始めてだ。

タッタッタッタッと曲がり角を曲がって一夏が見えなくなった所で、さっき立ち去った少女が現れた。

「いや～。流石男の子って所かな？ちゃんと決めるとこは決めるわね。まあ、あれだけの「覚悟」があれば心配しなくても大丈夫そうね」

バッ！と扇子を広げる。そこには「漢ッ！！」と書かれていた。

「それに「お兄ちゃん」も頑張っているしね」

その「お兄ちゃん」とやらを思い出して顔を赤らめ身体をくねらせながらその場を立ち去った。

『！？な、何だ？急に寒気が……』

急にに寒気を訴える翔太郎。フィリップはそれを気にせずツインマキシマムの説明をする。

『ツインマキシマムは使えばかなり強力だが、翔太郎への負担が大きい。だが、このW（ダブル）ならツインマキシマムが可能だ』

「じゃあ、それを使えばあれを倒す事ができると…！」

『ああ。但し、発動させるには少し時間が欲しい。だから』

「時間稼ぎをすれば良いですね。分かりました。やります」

えー。嫌だ～。とか、じゃ、私帰ります。とか言っているヤツ約二名いるが、無視する。

『じゃあ頼んだぜっ！！』

「はいっ！！ーーー総員、戦闘準備！これが最後だ。心して掛かれっ！！」

「「「「「「了解っ！」」」」」」

《撫子（なでしこ）》達は再度ドーパントの回りを囲む。二手に別れて、白並達は《風花（かぜはな）》を構え、雪目達は《枝垂（しだれ）》を構える。

「行くぞっ！撃てぇっ！！」

白並達は《風花（かぜはな）》でドーパントを撃つ。雪目達はそれぞれ縦三列に並び、ドーパントに突撃する。

「ぜぇりゃあああああッ！」

雪目、最初の一列がドーパントに斬りかかる。ドーパントはそれをいとも簡単に防ぐ。だが、後ろに控えていた仲間が斬りかかる。ドーパントは防ぐ事が出来ず攻撃を喰らうがあまり効いていない。

「なら！同じ事を繰り返すまでよっ！隊長ォ！援護射撃よろしくぅ！」

「言われるまでもないわっ！」

白並達は大きく広がり、《風花（かぜはな）》を休む暇なく連射する。それを見ているW（ダブル）は腰にあるメモリスロットからＩＳメモリを抜き、再度入れ直す。

《インフィニット・ストラトス　マキシマム　ドライブ》

そしてダブルドライバーからトリガーを抜き、トリガーマグナムにセットする。

《トリガー　マキシマム　ドライブ》

トリガーマグナムの銃身を直し、ドーパントの方へ向ける。

『準備完了まで五分二十秒だ』

『頼むぜ白並さん…！』

だが、そんな翔太郎の願いは届かず、ドーパントに異変が起きる。

ギェェェエエッ！！！！！

ドーパントが雄叫びを上げる。その周りにいた《撫子（なでしこ）》全員が吹き飛ぶ。

『な、なんだッ！？』

翔太郎が驚く。ドーパントがこっちを向く。突如猛スピードで突っ込んできた。

『おいおいっ！？ウソだろっ！？』

『おそらく僕達の狙いに気づいたんだろう。狙いを僕達に変えたんだっ！』

とは言え、ツインマキシマムを中断することは出来ない。してしまったら大変な事になってしまう。

『くそっ！！あとどれぐらいだっ！』

『二分四十秒っ！間に合わないっ！？』

もうすぐそこにドーパントが迫っている。

ギェェエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエッ！！！！

ドーパントが笑ったような気がした。お前の負けだ。と。

「翔太郎さん！フィリップさん！」

白並が助けようと動くが、間に合わない。『瞬時加速（イグニッションブースト）』を使っても間に合わない。ある人は手で顔を覆い隠し、ドーパントにえげつない言葉を吐いてる人もいた。

あと四五秒。だが、容赦なくドーパントは突っ込む。

ドゴンッ！！！！！とかなりの衝撃を受けて吹っ飛んだ。

しかし、吹っ飛んだのはW（ダブル）の方ではなく、

『ま、まさか……！？』

『は、ははは……最高じゃねえかっ！！一夏っ！！！』

横合いから一夏の攻撃を喰らったドーパントだった。

「最後はくれてやる。これで終わらせろっ！！」

キュンンンンンンン…と静かな機械音を鳴らしたながらゆっくり下へと降下していく。無茶な起動をした為に、展開を維持出来ないのだろう。

『ああ！終わらせるさっ！』

銃口をドーパントに向ける。準備完了だ。

『『トリガー　インフィニティ・バーストォッ！！！！』』

引き金を引く。大量の光弾。アリーナの半分を埋め尽くすほどの光弾。
耳の鼓膜が破れたんじゃないかというほどの爆発と失明してもおかしくない閃光が覆い尽くす。
閃光が消え爆発が終わり、煙が晴れる。

下にはメモリブレイクされ、倒れている男と壊れたメモリと強化アダプタがあった。

そして何故か決着を告げるブザーが鳴り響いた。

試合終了。勝者ーーー左　翔太郎、フィリップ

第八話：「済まない。待たせたね」ｂｙフィリップ（後書き）

オリジナルメモリを考えているのですが、・・・・・・全く思いつかないので誰かいいアイディアがありましたらこのクソ作者に教え下さい。

第九話：「ちょっとっ！？なに個人情報流してんのよっ！」ｂｙ鳳鈴音（前書き

早く書けました。

第九話：「ちょっとっ！？なに個人情報流してんのよっ！」ｂｙ鳳鈴音

「織斑くん！左くん！クラス代表、副代表決定おめでとう！」

パンッ、パパパンっ！とクラッカーの音が室内に響く。

「だそうだよ、翔太郎、一夏」

「「……」」

「へんじがない。ただのしかばねのようだ」

「し、篠ノ之さん……それはあまり、いえかなりシャレになりませんわ……」

目元を引き攣らせるセシリア。

既にクラス代表決定戦から三日が経っている。

Wの『トリガー　インフィニティ・バースト』により第三アリーナは崩壊してしまった。

それにより山田、千冬両先生は始末書、ＩＳ委員会への報告など、三日三晩不眠不休で動かされいまは泥のように眠っており、翔太郎と一夏は同じく三日三晩不眠不休反省室で反省文一万枚書かされた。

翔太郎はそれで終わったが、一夏はＩＳを無理に起動させた事に対して千冬に怒られ、箒には「なんて無茶をしたんだっ！！」と学園中追いかけられ、それを助けたセシリアが「大丈夫ですか？”一夏さん”」と心配しながらも、箒にドヤ顔をし、頭にきた箒は五割ま

しで一夏を追いかけまわしたという濃い三日間だった。

翔太郎と一夏は顔だけを上げ、ちらりと壁を見ると、そこにはデカデカと『織斑一夏・左　翔太郎クラス代表・副代表就任パーティー』と書かれていた。

とりあえず二人はどっちが代表副代表なのか気になった。

二人はそれを知るためフィリップの方をみる。視線の意味が分かったフィリップは本を閉じて言った。

「クラス代表は一夏で副代表は翔太郎になったよ」

そう聞いた一夏は項垂れて、翔太郎はソファに寝そべったままガッツポーズとった。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

さっきから相づちを打っている女子は二組だったような気がするんだが何故いるのだろうか？と翔太郎は疑問を持つ。というよりも明らかに三十名以上いる。

「人気者だな、一夏」

「……本当にそう思うか？」

「ふん！」

何故箒の機嫌が悪いのか理解できていない一夏。
すると二人の所にボイスレコーダーを持った二年生が近づいてきた。

「はいはーい、新聞部の二年の黛（まゆずみ）　薫子（かおるこ）。話題の新入生、織斑一夏君と左　翔太郎君に特別インタビューしに来ました～！あっ、これ名刺、よろしく～」

はぁ…？と疲れている翔太郎と一夏名刺を受け取る。そこには「特ダネからガセネタまで何でも書きますっ！」と描かれていた。いや、ガセネタはダメでしょ。

「ではではズバリ織斑くん！クラス代表になった感想どうぞっ！」

無邪気な子供のように瞳を輝かやせながらボイスレコーダーを一夏に向ける。

「えーと……」

乗り気じゃない一夏だが、期待を裏切るわけにもいかず、答える。

「まあ、なんというか、頑張ります」

「えー。もっといいコメントちょうだいよ～。おれに触るとヤケドするぜ、とか！」

作者的にはそれはないとおもう。ていうかチェンジで。

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

これもないと思う。

「じゃあ、次は翔太郎君！」

翔太郎は起き上がり、ポーズを決めて

「俺に惚れないよう……気をつけな」

完全ナルシストだな。

「うおぅ！良いねえ。そういうコメント待ってたんだよねえ」

グッ！と親指を立てる黛（まゆずみ）。

「あと、フィリップ先生とセシリアちゃんもコメントちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

と言いつつも、満更でもない様子のセシリア。その証拠に髪のセットに予断がない。

「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したかというと、それはつまりーーー」

「ああ、長そうだからいいや。フィリップ先生、コメントを」

さ、最後まで聞きなさい！というセシリアの声を無視してフィリップに話しかける。

「うーん、そうだね…。頑張るとしか言いようがないね」

苦笑いするフィリップ。

「いいですよ、適当に捏造してますから。よし、セシリアちゃんは織斑くんに惚れたってことにしよう」

「なっ、な、なな……！？」

顔が赤くなるセシリア。そして一夏はフォローとして

「何を馬鹿なことを」

「え、そうかなー？」

「そうですわ！何をもって馬鹿としているのかしら！？」

フォローしたのに怒られる一夏。

「だ、大体あなたはーーー」

「はいはい、とりあえず翔太郎君もフィリップ先生も四人並んでね。写真撮るから」

「えっ？」

意外そうなセシリア。しかしどこか喜色を含んで弾んでいるように

聞こえる。

「注目の専用機持ちと初の男の教師だからねー。あ。握手とかしてるといいかも」

「そ、そうですか……。そうですわね」

モジモジとし始めたセシリアはちらちらと一夏を見る。

「あの、撮った写真は当然いただけますわよね？」

「そりゃもちろん」

「でしたら今すぐ着替えてーーー」

「時間かかるからダメ。はい、さっさと並ぶ」

黛（まゆずみ）は一夏とセシリアの手を引いて、そのまま握手まで持っていく。

「……」

「？なんだよ」

「……」

「べ、別に、何でもありませんわ」

「……なんだよ、箒」

「何でもない」

何でもありそうな顔をしている箒。

「それじゃあ撮るよー。３５×５１÷２４×４８は～？」

「えっ？え、えと……」

「３．５７０だ」

「せいか～い」

フィリップがすかさず答える。

パシャッとデジカメのシャッターが切られる。そして何故か全員入っていた。

「あ、あなたたちねえっ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー。それにクラスの思い出になっていいじゃん」

ねー。と頷き合うクラスメイトたち。

「う、ぐ……」

苦虫をつぶしたような顔しているセシリアはにやにやとしているクラスメイトを睨みつける。それを不思議そうに見る一夏。

そして腹がへったのかフライドチキンやらフライドポテトやらをが

っつり食べている翔太郎やフィリップは黛(まゆずみ)に「この学園で何かおもしろそうな噂や話しはないかい？」と各々がパーティーを楽しんでいた。

こんな感じで『織斑一夏・左　翔太郎クラス代表・副代表就任パーティー』は十時過ぎまで続いた。

パーティーから次の日。

「なあ、一夏。この前作者が「ヤベェ…！「真剣(マジ)で私に恋しなさい！S」の義経がめちゃかわええっ！！ファ、ファイアーッ！！」って言ってたんだけど、どう思う？」

「既に末期だな。病院に行ったほうがいいな」

とくだらない話しをしているとクラスメイトから

「織斑くん、翔太郎くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

「「転校生？」」

首を横に振る二人。

「何でも中国の代表候補生なんだってさ」

へー。とどうでもいい感じに相づちを打つ。代表候補生といえば

「あら、わたくしの存在を今更ながら危ぶんでの転入かしら」

イギリス代表候補生、セシリア・オルコット。腰に手を当てたポーズが似合う高校生女子である。

「このクラスに転入してくるわけではないだろう？騒ぐほどではない」

もう一人腰に手を当てたポーズが似合う高校生女子篠ノ之　箒が何時の間にか一夏の側にいた。

「中国の代表候補生ねえ…。どういうやつなんだろうな」

翔太郎が呟く。すると何時の間にかいたフィリップが説明し出した。

「中国代表候補生、名前は「凰鈴音（ファン・リンイン）」一夏の幼なじみであり、一夏からは「セカンド幼なじみ」と言われている。そして中学三年生ごろには一夏にこくは「ちょっとっ！？何、個人情報流してんのよっ！」うん？」

教室の入り口から怒声が聞こえる。全員がそっちに振り向く。一夏が

「鈴……？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候「あ、それは聞いたからいいわ」ちゃ、ちゃんと言わせなさいよっ！このバカっ！」

地団駄踏む鈴。トレードマークのツインテールが上下に動く。

「おい」

「なによ！？」

バシンッ！！と聞き返した鈴の頭に出席簿アタックが決まった。こうかはばつぐんだっ！ーーーー鬼教官登場である。

「もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

怯える鈴。千冬のことが苦手なようだ。

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません……」

百パーセントビビっている鈴。哀れ

「またあとで来るからね！逃げないでよ、一夏！」

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

二組へと猛ダッシュ。うん、昔のままの鈴だな。と懐かしんでいる一夏。

「……一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったな」

「い、一夏さん！？あの子とはどういうーーー」

関係何ですかっ！？とは言えなかった。

「席に着け、馬鹿ども」

バシンバシンバシンバシンッ！と千冬の出席簿が火を吹いた。

千冬はまったく…。とため息を吐き、米神を抑える。

「ん。そうだ、左、フィリップ。少し用がある」

来い。と言われ、廊下にでる。

「何すか。千冬さん」

織斑先生だ。と言って翔太郎の頭を小突く。

「お前達に客……いや、依頼人と言ったほうがいいかもしれないな」

依頼人？と顔を合わせる二人。

「誰なんだい、その依頼人は？」

ああ。と千冬はもっている書類をめくる。

「名前は、チェルシー・ブランケット。オルコットの使用人だ」

第九話：「ちょっとっ！？なに個人情報流してんのよっ！」ｂｙ鳳鈴音（後書き）

鳴神さん、ディゴットさん、シグマさん。オリジナルメモリを考えてくださってありがとうございますっ！

まだオリジナルメモリを考えてくれる人募集しています！

第十話：「イタズラしちゃった♪ふふっ」ｂｙ更織　楯無（前書き）

書けました。

第十話：「イタズラしちゃった♪ふふっ」by更織　楯無

駅前のショッピングモール「レゾナンス」の中にある喫茶店に気怠そうな青年と十人中九人が絶対振り向きそうな雰囲気が抜き身の刀みたいな女性が喋っていた。

「うーん…、こういう事は俺の仕事じゃ無いんだけどなぁ……やりたくねえ」

「……少しはやる気を出せ『N（エヌ）』。『O（オー）』の奴は既に動いているぞ」

「そうですけど、俺の役目はメモリの売買と購入者の監視なんですよ……めんどくさいけど」

ブツブツとコーヒーを飲みながら文句を呟く青年。

「それにこの仕事なら『I（アイ）』さんの方が得意でしょ。ていうか『I（アイ）』さん、男なのに何で女装してるんですか？……似合ってますけど」

「女装は元々していない。自分の仕事はこの姿のほうが都合が良いだけだ。それとまだ仕事は終わってない」

まったく……とため息をつく。『I（アイ）』と呼ばれた男は何時の間にか持っていた刀を掴んで立ち上がる。

「じゃあな。ちゃんとやれよ」

「……分かりました。やればいいんでしょ、やれば」

『I（アイ）』はそのまま喫茶店を出た。

「はあ……、めんどくさいなぁ。何で人探しなんて事しなきゃいけないんだ？……ったく、死ねばいいのに」

あ、と『N（エヌ）』間抜け声を出し、そしてポケットから写真取り出した。

「ああ、そうだった。もう死んでるんだった」

写真にはセシリアに似ている女性が写っていた。

「君がチェルシー・ブランケットだね」

「はい。お待ちしていました」

ここは応接室。チェルシーはその場でお辞儀した。

「確か…アンタは…あの時いた…」

「その節は怪物からお嬢様を救っていただきありがとうございます。なんと御礼を申し上げたら……」

「い、いや、礼とかそんなのはいらないから。で、依頼っていうのは？」

さっそく本題に入る翔太郎。

「依頼と言うのはその「ちょっとまったぁっ！！」？」

バタンッ！と勢いよく扉が開かれた。三人は驚いて振り向く。

「その話、私も聞かせてもらえるかしら？良いよね、”お兄ちゃん”」

突然現れた水色の髪に扇子を持った少女がそう言った。

そして三人が疑問に思った事が一つあった。それは

「お兄ちゃん？フィリップ、お前妹っていたか？」

「いや、姉ならいたが…妹がいたとは聞いたことがないね」

「私は女性です」

だから私はお姉さんです。と言うチェルシー。

違うか……、と悩む翔太郎。考えに考えた結果、聞いてみる事にした。

「そのお兄ちゃんって誰？」

そう翔太郎が聞くと少女がニッコリと笑って扇子をひらく。

「貴方のことよ、左　翔太郎さん。いえ、”ショウお兄ちゃん”」

「なん、だと…！？」

開かれた扇子には「妹最強」と描かれていた。

驚きをあらわにする翔太郎。

「翔太郎、知っているのかい？」

「知ってるつーか、今思い出した……ッ」

頭を抱える翔太郎。その姿に困惑と疑問を持つ二人。

微笑む少女は翔太郎の隣に座り、自然な動作で頬にキスをした。

「チュッ♪」

「「！！」」

「な、なななっ！？」

驚き、ものすごいスピードで後ろに後退した。

「イタズラしちゃった♪ふふっ」

「何でこんな所にいるんだ！ーーー”楯無（たてなし）”！」

楯無（たてなし）と呼ばれた少女は只々微笑むだけだった。

翔太郎はどうにかしてこの場所から逃げようと考えるが、依頼人が

いるためそんなことは出来ない。

「翔太郎、その子とは知り合いなのかい？」

「ああ、コイツの名前は更織（さらしき）　楯無（たてなし）。……忘れたままのほうがよかった…」

「確か更織（さらしき）は……「裏工作を実行する暗部に対する対暗部用暗部」の「更織（さらしき）」かい？」

「更織（さらしき）」とは表にも裏にも多大な影響力のある家である。
他にも「間學（まがつ）」「悠戯（ゆうげ）」「白並（しらなみ）」などがいる。

「どうも初めまして。私の名前は更織（さらしき）　楯無（たてなし）です。たっちゃんと呼んでくださいね♪」

「ああ、よろしく。……それで、翔太郎とはどういう関係なんだい？」

楯無はその質問に対し、ニンマリと笑みを見せる。
その笑みを見た翔太郎は何かを感じたのか寒気を覚えた。

「婚約者「じゃねえよっ！！」夫で「もねえよっ！！」ぶー。じゃあ何がいいの？お兄ちゃん」

「まずお兄ちゃんと呼ぶのをやめろ。そして、俺はお前の婚約者でも夫でもねえ」

全否定する翔太郎は楯無との馴れ初めを話し出す。

「コイツとの関係は俺がおやっさんに弟子入りして間もない頃、コイツの親がおやっさんの所に依頼してきた時に会ったんだ。その頃は俺が高校生、コイツが中学生だったな」

思い出すように喋る翔太郎は少し寂しそうな感じだった。
対象的に楯無は嬉しそうに、楽しそうに喋る。

「そうそう、それで一悶着あって私達は仲良くなって最後には結婚式を「あげてねえよっ！そういう方向に持って行ってんじゃねえ！」あ、けど、お父さんは認めてくれたわ」

「なん、だと……？」

予想外の事に愕然とする翔太郎。
話がズレてしまったため、フィリップがチェルシーに改めて聞く。

「それで依頼内容は？」

「はい。人探しをお願いしたいのです」

「人探し？誰を探せばいいんだ？」

この人です、と写真を見せる。

写真に写っているのは、綺麗な金髪の妙齢の女性だった。その隣に気弱そうな男性が立っており、その真ん中には見覚えのある小さな女の子が立っていた。

「この真ん中に立ってる女の子って……セシリア？」

「そうです」

「人探しって言うのは……」

楯無がまさか……、という感じに呟く。

翔太郎とフィリップはそんな楯無の雰囲気に戸惑う。

「ええ。お嬢様の母君、今は亡きレンティア・オルコット様を探して欲しいのです」

第十話：「イタズラしちゃった♪ふふっ」ｂｙ更織　楯無（後書き）

……テストがあるためしばらくは更新できません。

第十一話：「「ウォーリーを探せ！」よりキツいよな」ｂｙ左　翔太郎（前書き

駄作です

第十一話：「「ウォーリーを探せ！」よりキツいよな」ｂｙ左　翔太郎

今はお昼時間。
ＩＳ学園の食堂は当然の如く、生徒達で賑わっていた。
生徒達は席に座ってＩＳの勉強という重荷を忘れて楽しく喋っている。
だがとある席の一角、そこはさながら葬式のように静かに、そしてどんよりした空気が漂っていた。

「死んだ人を探せ！……か、これは「ウォーリーを探せ！」よりキツいよな」

「比較対象がおかしくないかい？……難しいというより不可能である事は確かだね」

そのとある席の一角に座っている翔太郎、フィリップは依頼人のチェルシー・ブランケットの事を思い出す。

『お願いします。レンティア様を探してください。御礼は幾らでもします』

と言って、詳しい事は何も言わずに去ってしまった。
そして何時の間にかいなくなっていた楯無に対して翔太郎はキレるが、何とか怒りを鎮め、お腹が空いたら戦も出来ぬという事で、時間もお昼休みなので食堂にきたのである。

「で、どうするよ？とりあえず地球（ほし）の本棚で検索してみるか？」

「いや、すでに検索は終了している。……レンティア・オルコッ

トと夫のガレンズ・オルコットの両名は交通事故で死亡している。
もし、生きているとしたら「ダミー・ドーパント」の可能性が高い」

「ダミー・ドーパント」は人や物に変身できる能力を持っている。
戦闘能力は低い。

「それと昔あった「バイラス・ドーパント」みたいな事になってんじゃねえか？」

売店で買ってきたメロンパンを齧りながらそう言った。
「バイラス・ドーパント」とは毒を使うドーパントであり、都市一つ壊滅する事の出来る力を持っている。
だが、この時の場合は交通事故にあった使用者が昏睡状態に陥ってしまい、精神体だけがドーパントになったという事例がある。

「そちらも可能性はあるが……何ともいえないね。キーワードが少なすぎる」

コーヒーを啜りながらフィリップは言う。
二人が悩みに悩んでいると翔太郎の視界が真っ暗になる。

「だーれだ♪」

「……」

翔太郎は答えない。

「ヒントは貴方のエロ奴隷「じゃねえよっ！楯無！」あっ。正解♪」

翔太郎は振り向く。

そこには「私は貴方の奴隷」と書かれた扇子を持ち、楽しげな笑みを浮かべる更織（さらしき）　楯無（たてなし）がいた。

「えへへー♪」

そして翔太郎に抱きつく楯無。それを引き剥がそうとするが、力が強くて引き剥がせない。

「は・な・せ・よーっ！！」

「いーやーだー♪」

楽しそうな楯無。
その光景を見てフィリップは一つの結論に達する。

「二人共、付き合っているのかい？」

「違うっ！！！」

「そうです♪」

噛み合わない二人。
何とか翔太郎は楯無から離れる。

「つ、疲れた……あのなフィリップ。どう見れば俺とコイツが付き合っている風に見えるんだ。眼科に行ってこい」

明らかな嫌悪感を見せる。

「何でたっちゃんをそんなに毛嫌いしているんだい？いい子なのに。

何か理由があるのかい？」

「理由だぁ？教えてやるよ！それはなぁっ！それは……」

急に喋らなくなった翔太郎。するといきなり震え出した。

「ど、どうしたんだ翔太郎！？落ち着きたまえ！」

「お、おおおお思いだだだ出そうとととととししししたら、かかか体のふふ震えがと、とと止まらねえええっ！！」

自分でも震えの原因が分かっていないようだ。フィリップは多分（間違いなく）原因である楯無の方をみる。

「だ、大丈夫？お兄ちゃん？……記憶はちゃんと消したハズなのに（ボソッ」

最後のは聞かなかったことにする。

「うおおおおおおおっ！楯無テメエエエエエエエッ！！！！」

今だに震えている翔太郎には聞こえたようだ。

閑話休題

「はい、これ」

楯無が翔太郎に紙の束を渡す。

「これは？」

「レンティア・オルコットに関する調査報告書ってヤツね。とは言っても殆どが公式で調べられる物だったけど、一応と思って」

パラパラと紙をめくっていく。翔太郎は感心したように

「へえ……、すげえじゃねえか。流石楯無だな」

「ホント？じゃ、じゃあご褒美にキ「スはしねえよ」ぶー」

あっ、けどキス以外はしてくれるってこと！？という楯無を無視して事を進める。

フィリップは報告書をパラパラとめくる。するとあるページでめくるのを止める。

「これは…」

「どうした？フィリップ」

いきなりフィリップは何処からともなく本を出す。本の表紙にはこう書いてあった。

「ガレンズ・オルコット？何で夫の方を調べているんだ？」

そんな疑問を無視してフィリップはかなりの速さでページをめくる。

「……交通事故を装った”ガレンズ・オルコット”の……」

「えっ？」

翔太郎の疑問をよそに、フィリップは本を閉じた。

「何か分かったんですか？」

「ああ。だがしかし、まだ断片的な所しか分かってはいないがね。翔太郎、戻る準備をしよう」

「はぁ、戻るって何処に？」

フィリップは自慢気な顔して答えた。

「風都に戻るんだよ、翔太郎。そこにレンティア・オルコットは現れるだろう。……少しオマケが付いてしまうが」

マジで？と翔太郎と楯無は顔を見合わせた。

「待ってたわよ、一夏！」

同時刻、詳しく言うなら翔太郎が「うおおおおおおおおっ！楯無テメエェェェェェェェッ！！！！」と叫んでいた時、鈴、一夏、セシリア、箒の順に食堂に来ていた。

「まあ、とりあえずそこどいてくれ。食券出せないし、通行の邪魔だぞ。それと、ラーメンのびるぞ」

一夏は食券を渡し、鈴に注意する。

「わ、分かってるわよ！大体、アンタを待ってたんでしょうが！なんで早く来ないのよ！」

お盆に乗っているラーメンがこぼれそうになっている。

一夏が頼んだのは日替わりの鯖の塩焼き。ちなみに箒とセシリアはきつねうどんに洋食ランチ。

「向こうのテーブルが空いてるな。行こうぜ」

鈴を含めた全員に促す。

「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

「元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病気しなさいよ」

「どういう希望だよ、そりゃ……」

幼なじみの言葉にゲンナリする一夏。

「あー、ゴホンゴホン！一夏、そろそろその女とはどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですわ！一夏、まさかこちらの方と付き合ってらっしゃるの

！？」

疎外感を感じてか、箒とセシリアが多少棘のある声で訊いてくる。
他のクラスメイトも、興味津々とばかりに頷いていた。

「べ、べべ、別に私は付き合ってる訳じゃ……」

と言いつつも、どこか嬉しそうになる。だが、

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼なじみだよ」

「……」

一転して不機嫌になる鈴。

「？何睨んでるんだ？」

「なんでもないわよっ！」

「幼なじみ……？」

怪訝そうな声で聞き返してきたのは箒であった。

「あー、えっとだな。箒が引っ越していったのが小四の終わりだっただろ？鈴が転校してきたのは小五の頭だよ。て、中ニの終わりに国に帰ったから、会うのは一年ちょっとぶりだな」

一夏がそう説明する。

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

そう言って挨拶を交わす二人の間に火花が散ったように見えたのは気のせいではないだろう。

「ンンンッ！わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、鳳鈴音（ファン・リンイン）さん？」

「……誰？」

「なっ！？わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットでしてよ！？まさかご存じないの？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

とびっきりの笑顔でそう言った鈴。

「な、な、なっ……！？」

言葉に詰まりながらも怒りで顔赤くしているセシリア。

「い、い、言っておきますけど、わたくしあなたのような方には負けませんわ！」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

自信満々の鈴。

「い、言ってくれますわね」

セシリアはわなわなと震えながら拳を握りしめた。
それに対して、鈴は何食わぬ顔でラーメンをすする。

「あ、そうだ。今日の放課後って時間ある？あるよね。久しぶりだし、どこか行こうよ。ほら、駅前のファミレスとかさ」

「あー、あそこ去年潰れたぞ」

「そ、そう……なんだ。じゃ、じゃあさ、学食でもいいから。積もる話もあるでしょ？」

中三のときは受験勉強で忙しかったなぁ……と思う一夏だったが、久しぶりに会った幼なじみとは喋りたいモノだと考えた一夏は了承しようとしたが、箒に決められてしまう。

「あいにくだが、一夏と私はＩＳの特訓をするのだ。放課後は埋まっている」

「そうですわ。クラス対抗戦（クラス対抗戦とは、そのまんまクラス代表同士によるリーグマッチの事）に向けて、特訓が必要ですもの。特にわたくしは専用機持ちですから？ええ、一夏さんの訓練には欠かせない存在なのです」

本当は千冬との訓練なのだが、都合の悪い事は忘れたらしい。

「じゃあそれが終わったら行くから。空けといてね。じゃあね、一夏！」

ラーメンのスープを飲み干して、一夏の答えも待たず鈴は片付けに

行ってしまった。

「一夏、当然特訓が優先だぞ」

「一夏さん、わたくしたちの有意義な時間も使っているという事実をお忘れなく」

一夏は自分の時間は好きなようにしたいと抗議したかったが、二人の雰囲気的に無理だった。

「……ここが風都。良いところね」

エコの街、風都。そのシンボルである風都タワーを見て長い金髪の女性がそう言った。

「……いてくれると良いのだけれど、いるかしら？」

その女性は歩きはじめ、人混みの中へと消えて行った。

第十一話：「「ウォーリーを探せ！」よりキツいよな」ｂｙ左　翔太郎（後書き）

オリジナルメモリを考えてくれる人とまだ募集しております

第十二話：「うっさいわ！ハフ子っ！」ｂｙ鳴海亜希子（前書き）

遅くなりました。

第十二話：「うっさいわ！ハフ子っ！」ｂｙ鳴海亜希子

「何依頼放ったらかして帰ってきとんじゃー！！！」

「あべしっ！？」

パカァンン！！とスリッパで翔太郎の頭を直撃する。
風都へと戻ってきた翔太郎とフィリップ、そしてなぜかついて来た楯無の三人は鳴海探偵事務所に向かった。
事務所の扉を開けた瞬間、所長である「鳴海亜希子」にスリッパでいきなり翔太郎は叩かれたのだった。

「痛ってぇっ！何すんじゃー！！」

「なに織斑一夏くんの護衛をやめて帰ってきとるんじゃいっ！このハーフボイルドォ！」

「ハードボイルドォ！！ハードボイルドだって言ってんだろうがっ！！いいかげん覚えろ！！それに護衛をやめて帰ってきたわけじゃねえよ！」

「じゃあ何で帰ってきたのか言ってみなさいよ！こっちは織斑千冬さんっていうＩＳ学園の人からハフ子とフィリップ君がこっちに帰ってくるって聞いた時はビックリしたのよ！」

「ちょっとまてやコラァ！！なんだハフ子って！？ハーフボイルドだからハフ子ってか！？ハードボイルドだ！せめてハド子にしろや

ぁ！！」

「いや、どっちもダメじゃん」

楯無の冷静なツッコミが入る。

「うっさいわ！ハフ子っ！」

「ハド子と呼べやコラァ！！」

「待つんだ、二人共。話しの趣旨が全く違う方向へと逸れてしまっている。それと呼び方ならボイル子のほうが統一性がある」

フィリップがどうでもいい事を言う。

楯無はまさかのフィリップの答えに驚く。

「ええ！？い、いや「「それだぁ！！」」いいの！？」

閑話休題。

「ーーーという訳だよ、アキちゃん。だから僕達は風都に戻ってきたんだ」

フィリップは風都に戻ってきた理由を話した。一部を除いて。

「へぇ～。向こうでも依頼受けているんだ。流石はフィリップ君だね」

「おい。俺が抜けてんぞ」

「で、こちらさんは誰？」

ハフ子もとい翔太郎を無視する亜希子。

「あっ、申し遅れました、ＩＳ学園生徒会長兼翔太郎さんの妻の更織　楯無と言います。よろしくお願いします♪」

「ヒロインの座は私のモノ」と描かれた扇子を広げ、差も当然のように自己紹介する楯無。

ボイル子もとい翔太郎は当然のように反論するがスルーされる。

「だから俺ーーー」

「これはこれは、ご丁寧に」

「いえいえ、これぐらいは当然ですよ」

和やかに話す楯無と亜希子。そして無視され続けられている翔太郎。

その翔太郎を見て何とも言えない表情になっているフィリップは声をかける。

「……大丈夫かい？翔太郎？」

「……いままでの話しの中で一番扱い悪くないか？これ」

体操座りをして泣きそうな翔太郎。頭からキノコが生えてきそうだ。

「いや、そうでもない。扱いが悪いと言うよりーーーー惨めだね、

一番」

「お前が一番酷いわっ！」

「それはともかく、”照井（てるい）　竜（りゅう）”はどうしたんだい？居ると思っていたのだが」

翔太郎をまたもスルーしてフィリップは亜希子に疑問を投げかける。

亜希子は少し考えて、思い出したように言う。

「ああ、竜くんなら「急な仕事が入った。いつ帰るか分からない」って言ってたよ」

「急な仕事？」

復活した翔太郎が聞く。

「うん。詳しい事は知らないけど」

そうか…。と呟くフィリップは照井竜にも手伝って欲しかったのだろう、少し表情が暗かった。

「お兄ちゃん、照井竜って誰なの？」

「お兄ちゃん言うな。……この風都の刑事で俺達と同じ仮面ライダーだよ」

へぇ～。と頷く楯無。

「照井不在となると……俺達だけでやるしかないか。どうするフィ

リップ？」

「とりあえずはレンティア・オルコットが来るのを待つしかないね」

「それしかないですね」

そう話していると、亜希子が訝しげな顔する。

「ねえ、フィリップくん。今なんて言ったの？」

「待つしかないと、言ったが」

「そっちじゃ無くて、も一個前」

「レンティア・オルコットだが？」

と言った瞬間、亜希子は驚くべき事を言った。

「その人、もう居るよ。この事務所に」

「「「……は？」」」

翔太郎達は亜希子が何を言っているのか分からなかった。

すると向こう側の部屋から声が聞こえた。

「んく……ゴメンね、アキちゃん。長旅で疲れて寝てしまったわ……あら？貴方達は……」

欠伸を噛み殺しながら現れたのは写真と同じ妙齢の金髪の女性だった。

驚きを隠せない三人を尻目に金髪の女性は少し乱れている女性物のスーツを整えて言った。

「どうも初めまして、私はレンティア・オルコットよ。よろしくね」

「では、今日はこのあたりで終わることにしましょう」

「……」

「へんじがない。ただのばかのようだ」

「……酷くね？」

放課後、一夏は第二アリーナでセシリアと箒のツーマンセルでＩＳ訓練（という名のリンチ）をしていた。

ニ対一のＩＳ戦をされられた一夏はボロ雑巾のような状態になり、本人いわく「正真正銘の地獄を見た」と証言している。

「ふん。鍛えていないからそうなるのだ」

疲労困憊の一夏に対し、セシリアはけろりとしているし、箒は一夏と違い、多少疲れている状態だ。

「何をしている、早くピットに戻れ」

「お、おう。……って、箒？なんでこっち側に来るんだ？」

「私もピットに戻るからだ」

「いや、セシリアの方にー「ぴ、ピットなどどっちでも構わないだろう！」……さいですか」

一夏は白式（びゃくしき）の展開を解除する。すると同時にＩＳの補助が無くなるため、疲れがいきなり体にのしかかってくる。

一夏と箒はピットへと戻る。

「なあ、箒。今日、先にシャワー使わせてくれよ。っていうか箒、剣道部に入るじゃなかったのか？毎日俺に付き合っていたら部活で他の女子に出遅れるぞ」

「そ、それはお前が気にする必要はない。……こっちの方で出遅れる方が問題だ……」

「え？何？」

「な、何でもない！」

何でもありそうな態度だなとおもう一夏。

一夏は改めてシャワーの件を話そうとすると、バシュッとスライドドアが開いて鈴が現れた。

「一夏っ！お疲れ。はい、タオル。飲み物はスポーツドリンクでい

いよね」

「おお！サンキュー。……あー、生き返るー」

一息吐いて体を緩ます一夏を見て、鈴が微笑む。

「変わってないわね。若いくせに体のことばかり気にしてるとこ」

「あのなあ、若いうちから不摂生してたらいかんのだぞ」

「ジジくさいよ」

「う、うっせーな……」

にやにやとしている鈴は見透かしたような目で一夏を見る。

「一夏さぁ、やっぱ私がいないと寂しかった？」

「まあ、遊び相手が減るねは大なり小なり寂しいだろ」

「そうじゃなくってさぁ」

にこにこ。にこにことしている鈴は、いつになく上機嫌で話を続ける。

そんな鈴を見て一は何か勘違いをしたのか

「鈴」

「ん？なになに？」

「何も買わないぞ」

ずるっという擬音で鈴が姿勢を崩した。

「アンタねぇ……久しぶりに会った幼なじみなんだから、色々と言うことがあるでしょうが」

言うことねえ……、と全く思いつかない一夏。

「例えばさぁー「ゴホンゴホン！」

……なによ？」

上機嫌から一転して不機嫌になる鈴。しかし箒はどこ吹く風という感じで鈴を無視し、一夏に話しかけた。

「一夏、私は先に帰る。シャワーの件だが、先に使っていいぞ」

「おお！そいつはありがたい！」

「では、また後でな。一夏」

「また後で」の部分を強調して出ていった箒。

「……一夏、今のどういうこと？」

「ん？いや、いつもはシャワーは箒が先なんだが、今日は汗だくだから順番を変わってくれって頼んでー「しゃ、しゃ、シャワー！？『いつも』！？」あ、ああ」

驚きを隠せない鈴。

「い、一夏、アンタあの子とどういう関係なのよ！？」

「どうって……前にも言っただろ？幼なじみだよ」

「お、幼なじみとシャワーの順番と何の関係があんのよ！？」

「あ。言ってなかったけか、俺と箒は同じ部屋なんだ」

「……は？」

「いや、俺の入学ってかなり特殊なことだったから、別の部屋を用意できなかったんだと。あ、でも翔太郎は一人部屋だったな。いいなー」

「その翔太郎ってのはどうでもいいわよ！そ、それってあの子と寝食を共にしてるってこと！？」

「まあ、そうなるか。でもまあ、箒で助かったよ。これが見ず知らずの相手だったら緊張して寝不足になっちまうからな」

その言葉を聞いて俯く鈴。

「……」

「どうした？」

「……ったら、いいわけね……」

うつむき加減の鈴が何と言ったのか聞き取れず、一夏は耳を傾ける。

「だから！幼なじみならいいわけね！？」

「うおっ！？」

いきなりガバッと顔を上げられて、一夏は驚いて身を引く。

「わかった。わかったわ。ええ、ええ、よくわかりましたとも」

なんかひとりで納得し始めた鈴。

「一夏っ！」

「お、おう」

「幼なじみはふたりいるってこと、覚えておきなさいよ」

「は、はあ……」

「じゃあ、後でね！」

そう言って鈴は出ていった。

「……よく分からん」

とりあえず一夏は翔太郎が羨ましいとつくづく思った。

「な、なななっ！？」

「……」

「……ふむ」

翔太郎、楯無、フィリップの順で予想外の出来事に驚いていた。まさか既に事務所にいたとは思いもしなかったようだ。
亜希子はそんな三人にの状態に首を傾げ、レンティアは予想通りと言った感じに微笑んでいた。
翔太郎は震えている手でレンティアを指を指して何かを言おうとするが、全く出てこない。

「「お前は死んでる筈だ」……なんて言葉を期待してたのだけど、あまり時間がないのよね。時間は有限。無限ではないわ」

「あ、ああ、分かった。……全てを話してもらうよ」

「ええ、分かっているわ」

レンティアがソファに座る。
いざ話そうした時、突然事務所のドアが開く。
そこにいたのは、見るからに気怠そうな青年がたっていた。
青年はズカズカと事務所に入ってきた。そして事務所の中を舐めまわすように見るている。

亜希子が何か言おうとするが、青年に手で制され、レンティアのほうに向く。

「大丈夫大丈夫、俺は別に依頼しに来たわけじゃないから……めんどくさいけど」

ポケットに手を突っ込む。取り出したのは「N」と書かれたUSBメモリ。

「俺が此処に来たのは死んでもらうためだよ……死んでるんだけど」

《ナスカ》

青年の姿が異形の物へと変わる。

「じゃあね」

狂気が振り下ろされる。

第十二話：「うっさいわ！ハフ子っ！」ｂｙ鳴海亜希子（後書き）

次はバトルです。楯無さんが……

第十三話：「……ふむ。やはり私目当てなのね。人気者は辛いわ」ｂｙレンニ

バトル回です。

「っ！」

最初に動いたのは楯無だった。
楯無のＩＳ『霧纏の淑女（ミステリアス・レイディ）』の武装『蒼流旋（そうりゅうせん）』を部分展開し、ナスカ・ドーパントの剣撃を止める。
すかさず楯無はガラ空きの脇腹を回し蹴りを食らわせようとするが、防がれてしまう。しかしそれは予想していたようで『蛇腹剣（ラスティー・ネイル）』を展開させ、高圧水流を発生させる。
ドーパントはそれを後退する事で高圧水流から逃れた。余裕があるようで準備運動をしていた。

《サイクロン・ジョーカー》

遅れて翔太郎達も変身する。

『オラァ！！』

足に風を纏わせ次々と蹴りを放っていくが、全て除けられてしまう。

『ならこれだっ』

《サイクロン・メタル》

サイクロンメタルにメモリチェンジし、メタルシャフトを振るう。

『邪魔しないでよ。とっとと終わらして帰って寝たいんだよ……
…ウザッ』

鍔迫り合い。だが、わずかだがナスカ・ドーパントが押している。

『此処では分が悪い。事務所から出るんだ』

『分かった！ーーー楯無！レンティアさんを連れて逃げろっ！亜希子！フィリップの体よろしくっ！』

楯無はレンティアを抱えて窓からＩＳを完全展開し外へ出る。
Ｗ（ダブル）はナスカ・ドーパントと一緒に外へ出る。
亜希子は訳が分からず叫ぶ

「ちょ、ちょっと！私、聞いてないっ！」

『霧纏の淑女（ミステリアス・レイディ）』を展開し飛んでいる楯無はどこに身を隠すか考えていた。

「一体どこに逃げるのかしら？」

何故か嬉しそうに言うレンティア。

「……そうですね。とりあえずはこの風都を出たほうがいいですね。……なんか楽しそうですね、レンティアさん」

「楽しいとは思ってはないよ。ただ、相手がどんな手を使って私を殺しにくるか、興味があるだけよ」

……変わった人だなぁ。自分もあまり人の事は言えないがと思う楯無。

妙に度胸があるレンティアは楯無に抱えられたまま、風都を眺める。

「綺麗な街だな。エコの街とは中々にいい所だ」

「ええ、そうですね。私も何年か前に来た事がーーー」

ーーー警告！下から高エネルギー反応！

ドバッ！と下からレーザービームが放たれた。

楯無は何とかそれを回避する。だが、異常は起こった。

ガクンッ！と機体が落ちる。

「ぐっ！いきなり何が！？」

次は機体が大きく揺れる。

コントロールをしようとするが、何故か出来ない。

楯無の意思とは裏腹にどんどん下へと降下していく。

「突然どうしたの……？」

何とか無事に着地した。

着地した場所はビル建設の工事現場だった。

「…全く物騒なことをする人もいるわね」

「……いえ、人じゃないみたいですよ。レンティアさん」

前を見ると、黒々と光っていて身体中に鉄屑を大量に貼り付けたみたいなロボットが立っていた。胸の真ん中には小さな門みたいなモノがある。

名付けるなら『マシン・ドーパント』と言うべきだろう。

『……』

こちらを無言で見ている。

「……ふむ。やはり私目当てなのね。人気者は辛いわ」

「……まあ、確かに狙われてはいますけど、人気者はちょっと……」

「ないか」

「ないですね」

そんな会話をしていると、マシン・ドーパントは左腕を上げる。すると突然、その右手がズバッ！と飛び出した。いわゆるロケットパンチだ。

「なっ！？」

飛んだ手はレンティアを捕獲する。

楯無はそれをすかさず破壊する。
ドーパントは右手を上げるとガトリングへと変化した。

「！！」

楯無はレンティアを抱える。
ズガガガガガガッ！！と放った。それを楯無は嵐のような実弾射撃を、水のヴェールですべて受け止めて無効化する。
ドーパントはガトリングを放ちながらその近くにあった鉄骨に無くなった左手を押し当てた。すると鉄骨がドーパントの手となった。

（この場所はアレにとって最高の場所って訳ね……っ！）

楯無は内心で歯噛みした。
この場所で戦うのは分が悪すぎると考える楯無だが、先ほどの原因不明のシステムエラーを考えると得策ではない。

『……！』

ドーパントはガトリングを放ちながら再生した左手を長剣に変化させると楯無に突っ込んで来た。

「来たわよ！」

「分かってますっ！」

突撃槍（ランス）の『蒼流旋（そうりゅうせん）』を展開する。

（ドーパントには勝てなくても、退けるだけならっ！）

ランスの表面に水の螺旋が表面を流れて、まるでドリルのように回転をはじめた。

『……！』

「はぁっ！！」

ガギンッ！！とランスと剣がぶつかり合う。
その間にも楯無は水のヴェールで防ぎ続けている。

「くっ！」

『……！』

するとドーパントの胸の小さな門が開いた。
楯無は訝しげな顔をする。そして気づく。
だが、既に遅かった。

『……！！』

ドバッ！！と零距離でレーザービームを喰らった。
楯無は後ろにあったブルドーザーに激突し、鉄骨や石積みなどが崩落し、砂煙が舞う。
レンティアが楯無に駆け寄る。

「大丈夫！？ケガは？」

「……ケガは無いですけど、シールドエネルギーが少しばかりヤバいですね」

楯無は何とかして起き上がる。身体的にはダメージはあるのか、少し体が震えていた。

（……平和ボケってとこかしら）

楯無は内心毒づく。

ドーパントは両手を上げ、右手はガトリングを撃ちながら、左手は長剣を発射させた。

すぐさま水のヴェールで防ごうとするが、水のヴェールはガクガクと揺れるだけで、動かない。

（先程と同じシステムエラー！？）

水のヴェールで防ぐのを諦めて、レンティアを抱えて逃げる。

飛んで避けようとするが、システムエラーで満足にも飛べない。

（ＩＳにエラーを起こす。チャフミサイルならぬチャフレーザーってヤツねっ！）

危なげに避ける。

少しずつシールドエネルギーが減っていく。

（まずい…っ！）

どうすればいいか考えていると抱えられているレンティアが自分の体の上でパソコンを操作していた。

こんな状況で何してるんだど言おうとするが、除ける事に意識を集中しているために何も言えない。

レンティアのキーボードを打つ速さが尋常ではない。

そして作業が終わったのか、何時の間にか楯無のＩＳに接続されて

いた無数のコードを外す。

「いったい何を」

「いや、少しばかり作業をねーー来るわよ」

すぐ近くに長剣が迫っていた。

それをランスで弾く。だが、長剣は楯無を串刺しにするまで止まらない。

（一か八かやるしかないっ！）

楯無の周りに霧が立ち込める。そして突如爆発した。

ナノマシンで構成された水を霧状にして攻撃対象へと散布し、ナノマシンを発熱させることで水を瞬時に気化させ、その衝撃や熱で相手を破壊する『清き熱情（クリア・パッション）』を発動させ、長剣を破壊した。

その衝撃でチャフが吹き飛び、正常化した。

（よし、これならっ！）

楯無は動かせるようになった水のヴェールをレンティアに纏わりつかせ安全な所へ運んだ。

（ドーパントには小細工は通じない……なら、思い切りーーー）

「ぶつかるまでっ！！」

蛇腹剣（ラスティー・ネイル）を展開してドーパントに向かって一気に加速する。

ドーパントはより一層連射を激しくさせる。

楯無は弾丸の嵐を蛇腹剣（ラスティー・ネイル）で斬ったり、避けていく。

（シールドエネルギーは少ないけどっ……！）

キュインッ！！と音を置き去りにして楯無が加速する。瞬時加速（イグニッション・ブースト）だ。

「いっけぇぇぇぇぇぇぇっ！！！」

ドガギンッ！！とランスをドーパントに一点突破の突撃を放った。

衝撃が辺りに広がる。

（これなら……っ！？）

楯無は驚いた。

渾身の一撃だった。

倒せなくとも、ダメージは与えたはずだった。だが、

（全く聞いていないっ！？）

ドーパントは何事もなかったかのようにその場に立っていた。

むしろランスのほうがダメージが多く、殆どガラクタ同然となっていた。

殆どシールドエネルギーが残っていない楯無は動くことも間々ならない。

『……』

楯無はこのドーパントが笑ったような気がした。

「くそっ！！」

楯無は必死に後ろに下がろうとするが、間に合わない。

『……死ね』

キュガッ！！とドーパントが放ったレーザーが楯無の体を貫く。
だが、楯無は笑みを浮かべていた。
ドーパントはトドメとばかりにガトリングを放つ。
それを喰らった楯無は

「大当たり♪」

バシャッと水になった。

『……！？』

ドーパントは驚く暇もなく、後ろから衝撃を喰らい、吹っ飛ぶ。
楯無が蛇腹剣（ラスティー・ネイル）で叩き斬ったのだ。

「《ハルキュオネの抱擁》展開」

ドバッと大量の水がドーパントを襲う。そして水のヴェールが水とドーパントと一緒に包まれてしまう。

「ーーー発動」

ギュンッ！と球体状に圧縮されてしまう。中ではかき混ぜられるように水がうねっている。ドーパントは脱出しようとするが、中での激流に翻弄されている。

「これなら幾らドーパントでも抜け出せない……！」

これで終わった。
楯無はそう思った。レンティアがこちらに笑みを浮かべて歩いて来る。
だが安堵するには早い。ドーパントを倒した訳ではない。今は翔太郎と合流しなければならない。

「大丈夫なの？体は？」

「え、ええ。でも疲労でいつぶっ倒れるか心配ですがね」

「そう。しかしレーザービームで撃たれた時はビックリしたわ。いつ水分身と入れ替わったの？」

安堵の息と共に疑問を投げかける。
楯無は思い出したように言った。

「二重瞬時加速（ダブルイグニッション・ブースト）をしたんですよ。相手の油断を誘うためにわざわざ分身にランスを持たせて本体である私はドーパントの後ろで分身がバレたならいつでも行動できるようにスタンバっていたんですよ」

無茶な瞬時加速したせいで体が痛いですがね、と体をさすりながら言う楯無。

「っと、早く逃げましょう。《ハルキュオネの抱擁》はそう長くは持ちません。何処かに身を隠して、おにー翔太郎さん達に連絡を取りましょう」

「そうね。それが一番良さそうね」

楯無がレンティアを抱えてようとした時、上から光弾が落ちてきた。

「っ！？」

楯無はレンティアを抱え、回避行動を取り、光弾を避ける。
光弾が放たれた上を向く。

「えっ？」

楯無は驚いた。
おかしい、何で此処にいる？こんな所にいるはずがない。だってコイツはーーー

『いやー、全く。連絡がないから来てみれば……何でやられてんのかな？下っ端は使えねえ……泣けてくる』

そこにいたのはW（ダブル）と戦っているはずのナスカ・ドーパントがいた。

「な、なん、で……」

『ん？ああ、何で俺が此処にいるかって？決まってんじゃん』

おどけたように言うナスカ・ドーパント。

「ま、まさか……」

まさかそんな筈がない。翔太郎が、
お兄ちゃんが負ける筈がない。
そんな楯無の考えがぐるぐると頭の中で回る。

『逃げてきた』

「へ？」

間抜け声を出してしまった。
ものすごく拍子抜けしてしまった楯無。

『だってよ～、仮面ライダーと戦うのが仕事じゃないし、めんどさいし、レンティア・オルコットを殺すことが仕事だし。だから逃げて来たってワケ』

「は、はあ」

『だからーお仕事開始』

ナスカ・ドーパントが光弾を放つ。
楯無はそれを除けていくが、マシン・ドーパントとの戦いのダメージで思うようにいかない。

（シールドエネルギーが……っ！）

風前の灯火。攻撃出来ない。避けるだけで精一杯。最悪の状況。
そして最悪の状況は終わることなく、悪化する。
ドバッ！と何かが破裂した音が響いた。

「な、何が…？」

楯無は恐る恐る振り向き、ギョッとする。

『……』

《ハルキュオネの抱擁》をマシン・ドーパントはレーザービームで吹き飛ばしたのだ。

（……まずい）

絶体絶命の状況。

「……覚悟したほうがいいのかしら」

この状況を切り抜けるにはーーーー

第十四話：「え～～。それはそれでつまらないですね～」ｂｙＯ（オー）

「というわけだから、部屋代わって」

「ふ、ふざけるなっ！なぜ私がそのようなことをしなくてはならない！？」

ちょうど楯無とナスカ・ドーパントが相対している頃、ＩＳ学園学生寮で二人の少女、凰　鈴音と篠ノ之箒が言い争っていた。

「いやぁ、篠ノ之さんも男と同室なんてイヤでしょ？気を遣うし。のんびりできなし。その辺、あたしは平気だから代わってあげようかなって思ってさ」

「別にイヤとは言っていない……それにだ！これは私と一夏の問題だ。部外者に首を突っ込んで欲しくはない！」

「大丈夫。あたしも幼なじみだから」

「だから、それが何の理由になるというのだ！」

こんな感じで話しが進まないというよりも噛み合っていない二人。

鈴は我が道を行く性格、箒は人一倍頑固な性格で平和的解決とは程遠い物となっている。

鈴は自分の荷物であるボストンバッグを抱え直す。鈴曰く「あたしはボストンバッグ一つあればどこでも行ける」だそうだ。

「とにかく、今日からあたしもここで暮らすから」

「ふ、ふざけるなっ！出て行け！ここは私の部屋だ！」

「『一夏の部屋』でもあるでしょ？じゃあ問題ないじゃん」

そう言って同意を求めるように一夏の方に顔を向ける鈴。箒も鈴に出て行けという意見を欲するように一夏をみる。というよりも睨んでいる。

困った風に首を傾げる一夏はなんかいい方法ないかと考えているとある事を思いつく。

「なあ、ここは間を取って俺が翔太郎の部屋に仮住まいするってのはどうだ？鈴は俺の代わりに住むって事で」

というよりも男である俺が女子と同じってのがそもそもあり得ない。翔太郎が羨ましい……。と言う一夏。

その提案を聞いた恋する少女二人は

「「却下っ！！」」

「えー！」

当然のように拒否される。

いい方法だと思ったんだけどなぁと呟く一夏。さすが鈍感（バカ）。

「とにかく！部屋は代わらない！一夏はバカで！出て行くのはそちらだ！自分の部屋に戻れ！」

「途中で貶された気がするんだか」

「ところでさ、一夏。約束覚えてる？」

「む、無視するな！ええい、こうなったら力づくでーーー」

激昂した箒はベットの横に立てかけてあった竹刀を握って防具も何も付けていない鈴に振り下ろす。

「あ、馬鹿ーーー」

パシィンッ！とものすごい音が響いた。

「鈴、大丈夫か！？」

「ふふん、大丈夫よ。今のあたしは」

「……！」

見ると、頭に振り下ろされた竹刀はＩＳが部分展開した右腕によってしっかりと受け止められていた。

「中国代表候補なんだから」

不敵な笑みを浮かべる鈴。

一夏と箒は驚いた。いくらＩＳの展開が速くても、その判断を下すのは生身の人間、ＩＳの展開速度は人間の反射限界を超えないのだ。

「ていうか、今の生身の人間なら本気で危ないよ？」

そしてさっきの打撃は、およそ素人が土壇場で対処できるレベルで

はない。

「う……」

怒りにまかせて自制心を失ったという指摘が何より効いたのか、箒はバツが悪そうに顔を逸らす。

「ま、いいけどね」

「とりあえず何故か俺が貶された件なんだが」

「それは置いといて、や、約束……覚えてる……よね？」

一夏の抗議は置いとかれて、急に鈴が顔伏せて、ちらちらと上目遣いで一夏を見る。心なしか恥ずかしそうである。

「えーと、あれか？鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚をーー」

「そ、そうっ。それ！」

「ーーおごってくれるってやつか？」

「……はい？」

「だから、鈴が料理出来るようになったら、俺にメシをごちそうしてくれるって約束だろ？」

いやー、ありがたいと嬉しそうに言う一夏。

「いやしかし、俺は自分の記憶力に感心ーーー」

パアンッ！と何かを叩く音がした。

「……へ？」

鈴が一夏の頬を叩いたのだ。

「……」

肩を小刻みに震わせ、怒りに充ち満ちた眼差しで一夏を睨んでいる。しかもその瞳にはうっすらと涙が浮かんでいて、唇はそれがこぼれないようにきゅっと結ばれていた。

「あ、あの、だな、鈴……」

「最っっっ低！女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ！犬に噛まれて死ね！」

そこからの鈴の行動は言うまでもない。

「……まずい。怒らせちまった」

静かになった部屋に一夏の言葉がよく響いた。

「一夏」

「お、おう、なんだ箒」

「馬に蹴られて死ね」

そう言って箒はベットに横になり、寝てしまった。

「はあ……」

一夏はため息を吐いてベットに入り、鈴にどう謝るか考える事にした。当然寝ることは出来なかった。

「一夏のばかばかばかばかばかばかばかばか……っ！！」

鈴は自分の部屋に戻ることなく、学生寮の外へと出た。
近くにあったベンチに座り、呪詛のように一夏の文句言い始めた。

「一夏バカァ！！鈍感！マヌケ！フラグ男！カッコつけ！シスコン！唐変木！ジジイくさい！一夏なんて！一夏なんてぇ！大っっっっっ」

突然静かになる。

「……好きだけど」

鈴は顔をリンゴのように真っ赤になりながら言った。だが、すぐに呆れ顔になる。

「……でもあたしの一世一代の告白をあんな曲がりに曲がった感じになってんのよ。アイツの頭の中見てみたいわ……」

鈴は気分を紛らわそうと辺りを見渡すと自販機を見つけた。ここまで走って喉が渇いてるから何でもいいから飲みたいと思った鈴は自販機の所まで歩き、お金をいれる。

「ここは無難にコーラかな」

ピッと自販機のボタンを押す。ガゴンッという音がした。

「……お汁粉サイダー??」

コーラではなくお汁粉サイダーという摩訶不思議なジュースが出てきた。

「確かに選んだのは炭酸飲料だけど……おかしくない?」

鈴は自販機を蹴りつつしょうがないと呟きながらフタを開けて一気に飲む。

「ぶっ!?な、なによこれっ!チェンジどころかゲームセットじゃないのよ!」

空き缶をゴミ箱に叩きつけてベンチに座りなおした。

「あーー……なんかすごく虚しい。あれもこれも全てアイツのせい……」

意気消沈。そんな感じだった。

ぼーっと空を見上げていると流れ星が出て消えていった。
鈴は一夏の鈍感とブラコンが治りますようにと願ったが、いや無理かと思い直して立ち上がり自分の部屋に戻ろうとする。が、

「少し良いですか？」

と後ろから鈴を呼び止める声がした。
鈴は後ろを向く。そこには水玉模様のコートを着た白髪の少女が立っていた。
白髪の少女はニコニコと微笑んでいて水の入ったペットボトルを弄んでいる。

「えっと……アンタだれ？ここは部外者立入禁止よ」

「いえいえ、ちゃんと許可を貰って入りましたよ？いえ、私人探しをしていましてＩＳ学園へと足を運んだんですよ。けど仕事仲間が既に見つけてしまいまして。いえ、それで手持ち無沙汰になってしまいまして、なんかすることないかなーと考えていたら、忘れていたことを思い出したんですよ」

「お、思い出したこと？」

休みなく喋り続ける少女に引きつつも疑問を浮かべる。
すると少女はニタァと笑みを深めて

「知りたいんですね？いえ、知りたくなっちゃったんですね？そうですねよ～。人の秘密を知りたがるのは人の性ですものね～。けどいけませんよ～。人の秘密を知るということは人の心を覗くのと一緒なんですよ？人の心は知らないほうが身のためですよ？」

なんかムカッときた鈴。

「じゃ、じゃあ聞かないでおくわ」

「え～～。それはそれでつまらないですね～」

「……」

ニタニタと笑みを崩さない少女の物言いにキレる寸前の鈴。

「おっと、そうでした！こんな所で喋っている時間はあまりないのでした！いえいえ、すみませんでした。呼び止めてしまい名も名乗らずに。『O（オー）』と言います。いえ、本名ではありませんが一応仕事中なのでして。いえいえ、それではまたご縁があれば凰　鈴音さん？」

少女はそう言って姿を消した。

「な、なんだったのあれは……？」

鈴は首を傾げるしか無かった。

「あれ？あたし名前言ったっけ？」

その疑問に誰も答えない。

『あの野郎、戦いの途中でいきなり逃げやがって！なにが「あっ、スイマセン。今日サンデーの発売日なんで逃げます」だぁ！？マガジンを買えやぁ！！』

『僕はジャンプ派だね』

Wは「ＩＲ・Ｗ」に変身して逃走したナスカ・ドーパントとの後を追っていた。

最初はWとナスカ・ドーパントは戦っていたのだが、途中でナスカ・ドーパントが戦いをやめ、逃走してしまったのだ。

『おそらくナスカ・ドーパントはたっちゃん達の所に向かっているだろう。たっちゃん達が危ない』

『ああ、分かってる。いやしかしホントに生きているとは思わなかったぜレンティアさん。あの時はビックリしたぜ』

と軽く驚いている翔太郎に対し、フィリップは少し淀んで口を開く。

『……翔太郎、レンティア・オルコットは正確には生きているのではなく、生き返ったんだ。……ガイアメモリでね』

『はぁっ！？ど、どういう意味だそりゃあ！？そんな人を生き返らせるメモリがあんのかよ？聞いたことも見たことないぜ』

ガイアメモリはＡからＺまである。その中でも人を生き返らせる効

果があるメモリはない。

『僕もレンティア・オルコット自身を見るまでは半信半疑だった。だが、それは今日確信に至った。メモリは「A」アンデットメモリだ。』

『アンデットメモリ？……聞いた事ねえな』

疑問に思う翔太郎。フィリップはそれはそうだというフィリップはアンデットメモリについて説明する。

『アンデットメモリは未完成の中の未完成だからね。起動するかもどうかも怪しいメモリだ。アンデットメモリはＴ１ガイアメモリの試作品というヤツだね』

『試作品？』

『アンデットメモリは５３種類あり、人の形や虫や動物の、Ｔ１ガイアメモリに必要な要素を調べるためのメモリだった』

フィリップはそう説明していく。

だが、翔太郎は分からないことがあった。

『なるほど。けどよ、何でアンデットメモリなんて名前がついているんだ？試作品なら名前なんていらなくねえか？』

『翔太郎、それは名前の通りだよ。アンデットメモリは人が死んで発動するメモリだからね。「死体」の記憶が内包されたメモリ』

し、死体！？と声をあげる翔太郎を無視して説明を続ける。

『試作品といえどガイアメモリはガイアメモリだ。それで普通では発動されない人、死体に対して実験をおこなった。名の通り、アンデット・ドーパントとして生き返った。だが、アンデット・ドーパントは暴走を引き起こし、研究所は全壊。アンデットメモリは廃棄されたんだ。やはり死体ではメモリの制御は無理なようだね』

『廃棄された……ってじゃあもしレンティアさんがアンデット・ドーパントとして生き返ったとしたら、どうして暴走してないんだ？それ以前にどこでアンデットメモリを手に入れたんだ？』

『……分からない。地球（ほし）の本棚ではレンティア・オルコットは死亡と確立しているため、詳しい事までは調べることが出来ない』

悔しそうに言うフィリップ。

『ああ！もうめんどくせえっ！！レンティアさん本人に確認すりゃあいいだけだっ！』

一気にスピードを上げ、楯無の所まで急ぐ。

第十五話：「諦めなよ。俺達の勝ちは決まりだぜ」ｂｙＮ（エヌ）（前書き）

お、遅くなってすいませんでした……

第十五話：「諦めなよ。俺達の勝ちは決まりだぜ」ｂｙＮ（エヌ）

『さあて、終わりにしようか……帰って寝たい』

『……！』

満身創痍の楯無にトドメを刺そうと近づく二体のドーパントは最後の一撃を放とうとしていた。

（くそっ！『槍』を使う？いえ、あれは発動に時間が掛かる。だからと言って『特攻型』を使う訳にもいかない。このままじゃ……っ！）

やられる。と楯無は思った。だが、楯無はすぐに考えを改める。

（……自分はどうなってもいい。だからレンティアさんだけは守るっ！）

諦めかけていた自分に発破をかけてドーパントを睨み、蒼流旋（そうりゅうせん）を構え直す。

『へえー、こんな状況でもどうにかしようと考えているんだ。カッコイイね～ロシア代表さん？けど、そんな儚い努力は無駄になっちゃうんだよね……じゃあね』

『……ッ！』

二体のドーパントは最後の一撃、巨大な光弾、ガトリングを全開で放ちながらロケットパンチを楯無に向けて放った。
楯無は残り少ないシールドエネルギーを全て防御に充てる。

「水鏡(みずかがみ)！」

相手の姿が映る程の透きとおった水の鏡を展開して防ぎ、せめぎ合いになる。

「う、ぐぐぐ……っ！」

『諦めなよ。俺達の勝ちは決まりだぜ』

「だ、だれが諦めるものですか……っ！！」

減り続けるシールドエネルギーを見て険しい顔になる楯無。それを嘲笑うかのように二体のドーパントは勢いを上げる。

（『水鏡(みずかがみ)』が崩れるっ！？）

『頑張れー頑張れー』

「くっ、む、ムカつく……っ！」

ビキビキッと『水鏡(みずかがみ)』に罅が入る。シールドエネルギーもヤバくなっている。

（どうする？どうすればこの状況を打開できる？どうすればーーー）

「落ちつきなさい更織さん」

思索していた楯無にレンティアが突然話しかける。

「あ、あの、です、ねっ！今この状況で落ちつける訳がないの分かっていますよねっ！？ていうか、なんでそんなに落ちついているんですか！？」

「それはね、私が大人だからよ」

「納得出来そうで出来ない理由を言わないでくださいっ！あー！この人どっか放り投げたいっ！！」

本気でレンティアを放り投げて帰りたいと思った楯無は片手で顔を覆う。

「落ちつきなさい。冷静にならないと。リラックスリラックス♪」

「とりあえずレンティアさん殴っていいですかっ！？」

そんなことを喋っているうちに『水鏡（みずかがみ）』が限界に近づいていた。

楯無は勢いを殺すためにわざと少しづつ後ろへ下がっていく。もう限界だとそう思っていた直後に楯無の後ろから6機のビットが現れた。6機のビットは二体のドーパントに同時に射撃を放った。

嵐のような射撃に楯無への攻撃を止めビットへの撃墜に切り換えたが、ビットを捉えることが出来ない。

『新手！？……めんどくせっ！』

ナスカ・ドーパントは後ろに下がるが、

「ドーパントか。見かけ倒しだな」

『なっ！？』

後ろから突然衝撃がきた。ナスカ・ドーパントは近くにあったクレーン車に激突した。

『……！？』

マシン・ドーパントは突然の事に驚きながらもナスカ・ドーパントを援護しようとするが、

「動くな、邪魔だ」

６機のビットマシン・ドーパントを邪魔するように囲み、至近距離で射撃する。

突然現れた正体不明の少女はマシン・ドーパントに目もくれずナイフを展開してナスカ・ドーパントに斬りかかる。ナスカ・ドーパントも剣で応戦し、鍔迫り合いになる。

「どうした？押されているな。ＩＳはドーパントに勝てないんじゃないのか？」

顔は見えないが、口元が侮蔑の笑みでゆがんでいる。

『押されている？イヤイヤー違う違う。押されてあげてるんだぜ間違えないでくれよな……ウザッ！』

「はっ！強がるなよ、弱く見えるぞ？」

少しずつ押さ始めているナスカ・ドーパント。それを呆然と見つめる楯無は独り言を呟く。

「……あれは一体……」

「あれは強奪されたイギリス第三世代ＢＴ兵器搭載二号機、サイレント・ゼフィルス……」

「な、なんで亡国機業（ファントム・タスク）がっ！？」

亡国機業（ファントム・タスク）とは第二次世界大戦中に生まれた秘密結社。他国のＩＳを強奪をしている以外は組織の目的や存在理由は、規模などの詳細が一切不明の謎が多い組織だ。

それを知っている楯無はなんで亡国機業（ファントム・タスク）が出てくるのが分からなかった。それに何故亡国機業（ファントム・タスク）が自分達を助けるのかが理解出来なかった。

しかし、レンティアは

「……」

驚きもせず、ただ見ているだけだった。

とある高級ホテルの一室に長身で豊かな金髪を持ち、抜群の美貌を持つ女性とその女性に頭を撫でられ気持ち良さそうに目を細めている黒いロングヘアーの女性がベッドの上で横になって裸で抱き合いながら話していた。

「なあ、『スコール』。いいのか？『エム』の奴を行かせておいてよ」

スコールと呼ばれた女性は微笑んで頭を撫でていた手を頬においてオータムと呼ばれた女性は顔を顰めて

「良いのよ。あの子には任務の過程なのだから都合いいの。心配しなくてもいいわ、『オータム』」

「だれがあんな奴の心配なんかするかっ。むしろそのまま死んで欲しいくらいだ」

「ダメよ、そんなこと言っては可愛い顔が台無しだわ」

オータムは吐き捨てるようにそう言った。そんなオータムを見てスコールは微笑んで嗜めるように言った。

「か、かか可愛いななんて言うなぁ……っ！」

オータムの顔が赤くなる。

「フフッ、何度でも言ってあげる。可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い」

「ううっ……」

スコールはオータムのリンゴみたいに真っ赤な顔を見て満足したのかベッドから起き上がりバスローブを羽織ってパソコンを立ち上げる。

パソコンのキーボードを叩く。とあるウィンドウが開く。

そのウィンドウにはガイアメモリとダブルドライバーが映し出されていた。

「スコール、それは……」

「そうよ。けど、アナタが考えているのとは少し違うわ」

スコールは微笑むが、すぐに顔を顰める。ウィンドウには解析不能と出ていた。

「……やっぱりこれ以上の解析は無理みたいね。どうしたらいいかしら？」

困っているのに、声だけは楽しそうに響いた。

「弱すぎるぞ。ドーパントとはこんなモノなのか」

『おいおい……っ！そんな挑発すんなよ。キレちゃうぞー！』

押されていたナスカ・ドーパントはエムを弾き飛ばす。ナスカ・ドーパントは無数の光弾を放つが全て少女のシールド・ビットで防がれてしまう

『めんどくせーなー！亡国機業（ファントム・タスク）とかすっごいめんどくさいヤツが出てくるなんて……逃げるわ。下っ端さん、あとよろしく』

ナスカ・ドーパントはマシン・ドーパントに全てを押し付けて飛んで逃げようとするが、

『待ちやがれっ！このサンデー野郎がぁぁぁっ！！！！』

ナスカ・ドーパントに猛スピードで突っ込んでくる物体がいた。

『『ジョーカーエクストリームっ！！』』

『うおっ！？』

ドゴンッ！！と地面に砂埃と衝撃を撒き散らして激突した。

『チッ！外したか。次はゼッテー当てるっ！』

『新しいメモリの力を試すのにちょうどいいね』

砂埃の中から出てきたのは翔太郎、Wだった。

「お兄ちゃん！」

『大丈夫か！？楯無、レンティアさん！それにお兄ちゃんと呼ぶなっ！』

「ギリギリの所ってとこかしら。『亡国機業（ファントム・タスク）』が助けてくれわ」

『ファントム・タスク？誰だそりゃあ？』

『確か、ファントム・タスクは……』

「……あの子よ」

Wは楯無の指を指す方向を見る。すると少女もこちらを見て舐め回すようにWを観察する。

「……お前が仮面ライダーか。遅いぞ、早くしろ」

『すまねえな。とっととコイツらを倒すぜ』

『僕の側、変えよう』

《グラシア》

青色のメモリをサイクロンメモリと変える。

《グラシア・ジョーカー》

新たなフォーム「グラシアジョーカー」になったW。周囲に冷気が立ち込める。

『なるほど、ヒートの逆バージョンって訳か』

『まずはマシン・ドーパントからだ』

Wは瞬時加速（イグニッション・ブースト）で一気に距離を詰めてドーパントを殴り飛ばし、ドーパントとの足を凍らせる。

『メモリブレイクだ』

《ジョーカー　マキシマム　ドライブ》

翔太郎はジョーカーメモリをメモリスロットに入れる。

Wの周囲に無数の氷塊が現れ、マシン・ドーパントへと放たれる。

『……ッ！？』

少女の攻撃からやっと回復したばかりのマシン・ドーパントはどうすることも出来なかった。

『派手に行くぜっ！』

Wの拳が巨大な氷に覆われると無数の氷塊がドーパントに次々と当たる。Wはマシン・ドーパントの真上と跳躍し、巨大な氷で覆われた拳を降り下ろした。

『『ジョーカーインパクトっ！！』』

ドゴンッ！！とマシン・ドーパントを叩きつぶすとともに爆発が起きる。壊れたメモリと使用者が気を失って倒れていた。

『さて、後はテメェだけだぜ、サンデー野郎』

Wがナスカ・ドーパントを睨む。ナスカ・ドーパントはサイレント・ゼフィルスの6機のビットに囲まれて身動きが取れないこの状況に溜息をついて身体を脱力させた。

『うわぁ……何このメンドクサイ状況?……泣いていい?』

『さあ、もう一回行くーーーん?何だこのトランプ?』

もう一度メモリブレイクをやろうとしたが、上から落ちてきたトランプを手に取る。するといきなり眩い閃光を放った。

『ぐあっ!?な、なんだっ!?』

閃光によって視界が遮られたWを見て、チャンスと思ったナスカ・ドーパントは逃げようとする。

「逃がすか」

少女はレーザーガトリングをナスカ・ドーパントに連射した。だがそれはナスカ・ドーパントに避けられる

「チッ、めんどうだな。さっさとーーーッ!?」

何かを察知してその場から離れると同時に上から檻が落ちてきた。しかもただの檻ではなく、上の天井部分に大きい棘が無数にあった。そしてその檻の上に人らしきものが立っていた。

「……誰だ」

『……』

そこには奇術師が立っていた。シルクハットを被り、ステッキを持ち、黒いマントに薄ら笑いを浮かべている仮面をつけていて表情は見えない。奇術師（マジシャン・ドーパント）はステッキを投げて指を鳴らすと数が増え豪雨のように降り落ちてきた。

「チッ！」

少女はシールド・ビットを展開して防ぐが楯無達はシールドエネルギーがほとんどないために防ぐことが出来ない。

『翔太郎！』

『分かってるって！』

《メタル・グラシア》

視力が回復したW（ダブル）メモリチェンジし、楯無達に降りかかるステッキをメタルシャフトを振りかぶり、楯無達の所に巨大な氷の壁を作って防いだ。W（ダブル）もメタルシャフトを振るってステッキを防ぐ。

『クソッタレ！！あいつらは！？』

『翔太郎！あそこだ！』

奇術師はナスカ・ドーパントの所にいた。二言三言話すと二人の後ろから長細い一人位は入ることが出来る箱が出てきた。ナスカ・ド

ーパントと奇術師は中に入り、ナスカ・ドーパントが手を降って、

『じゃあね♪』

二人が入った箱のフタがしまった。すると突然爆発し箱が粉々になってしまった。楯無達はその光景に唖然とした。

「……自爆？」

楯無がポツンと呟いた。

『いや、違う。おそらくどこかに瞬間移動したんだ……手品のようにね』

フィリップが冷静に分析する。

『……ってことはあいつらは、逃げやがったなァァッ！！！』

「……」

翔太郎はそう叫び、少女は只々、その場を見つめているだけだった。

そして、

「……これで終わったわね」

レンティア・オルコットの存在が大きく膨らむ。

第十六話：「ん～ふ～ふ～、鈍感だね～」ｂｙＭ（エム）（前書き）

ネタが思いつかねぇ…！

第十六話：「ん～ふ～ふ～、鈍感だね～」ｂｙＭ（エム）

「……おい、サファイア。もう終わった、私は帰るぞ」

少女はレンティアのほうを向いてそう言い放った。レンティアは不満そうに応える。

「あら、もう帰っちゃうの？久しぶりに会えたのだからもう少し一緒にいない？『エム』」

「私は犯罪者だぞ？無理に決まっている……それにお前を後生大事に抱えている更織１７代目当主が黙っているわけないだろう？」

エムと呼ばれた少女は楯無に薄ら笑いを浮かべて言った。楯無は何も言わずに睨む。

『えっと……何この状況？』

『……ふむ、色々事情があるみたいだね』

今の状況について来れない翔太郎とフィリップは困惑してただ黙ってみているだけだった。

睨んでいた楯無は重々しく口を開く。

「……亡国機業（ファントム・タスク）ね。助けてくれたのは礼を言うけど、何が目的で風都に来たのかしら？」

楯無は笑顔で言っているが、目が笑っていない。

「ふん、勘違いするな。私がここに来たのはサファイアに呼ばれてきただけだ。それにお前達を助けにきたわけじゃない」

エムはせせら笑う。翔太郎がとある疑問をぶつける。

『なあ、アンタ。さっきから『サファイア』って呼んでるけど誰に言ってんだ?そんな名前の奴、ここにはいねえぞ?』

それを聞いたエムは少し驚くようにレンティアを見る。その視線にレンティアは苦笑いを浮かべる。

「……更織さん、ここは私の顔を立てて彼女は見逃してくれないかしら?」

「はぁ!?何を言っているんですか!ここで亡国機業(ファントム・タスク)を見逃せばーーーー」

「それは分かっているわ。……そうね、それなら「取引」ってのはどうかしら?私が彼女の代わりになるわ。どう?」

「ど、どうって……というより、レンティアさんは関係ないじゃないですか」

楯無の言い分にレンティアは大袈裟に驚く。

「あら、関係大アリよ。だって彼女を亡国機業(ファントム・タスク)を呼んだのはこの私なのよ?」

その場が一瞬静寂に包まれる。そして、

「はあぁぁぁぁぁぁあぁぁぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあぁっ！？」

『へー』

『ふむ』

楯無は大いに驚き、翔太郎とフィリップの二人はただ相槌をうつ。

「え、え、え？ちょ、ちょっと待って！な、ななんで、レンティアさん！？」

驚いている楯無の質問にレンティアは何でもないよう応える。

「それはね、更織さん。私が亡国機業（ファントム・タスク）の一員だったからよ」

「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあぁぁぁぁぁぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？！？」

『落ちつけ、楯無』

『落ち着きたまえ、たっちゃん』

また驚く楯無を翔太郎とフィリップが諌める。

「ちょ、まっ、ええっ！？」

『モチつけ。あ、間違えた。落ち着け楯無』

『モチつきたまえ。あ、間違えた。落ち着きたまえ、たっちゃん』

暇なのか、ボケる二人。

「まあ、今は「元」だけどね」

『前、亡国機業（ファントム・タスク）にいて、それでサファイアとよばれていたのか』

「ええ、そうね。改めて自己紹介しておくわ。「元」亡国機業（ファントム・タスク）研究部門幹部『サファイア』、レンティア・オルコットよ。再度よろしく」

楯無に抱えられたまま、自己紹介をするレンティア。楯無はあまりのことにオーバーヒートを起こしている。

「……用は無い、じゃあな。もう二度と呼ぶな、サファイア」

「ええ、分かったわ。それはもう有りえないから」

笑顔で言うレンティアを見つめてエムは言葉を発さず口だけ動かし何かを言うとその場から飛び去った。姿は既に見えない。

「ーーーはっ！亡国機業（ファントム・タスク）は！？」

『もうどっか行ったぜ』

「……はぁ、もう良い。疲れたわ」

ガックリと肩を落とす楯無。

「レンティアさん、分かってますね？亡国機業（ファントム・タスク）のこと話して下さい

ね」

楯無はレンティアを睨む。レンティアは苦笑いで頷く。

「ええ、分かってるわ。じゃあここじゃあ何なんだし、事務所のほうで話をしましょうか」

『ああ、そうだね』

「私の努力を返してほしい……」

W（ダブル）、レンティア、楯無の三人は鳴海探偵事務所へと向かう。

『やっとオチついたな。楯無』

『たっちゃん、座布団二枚持ってきてくれないかい？』

「持ってこないっ！！！」

『ん～ふ～ふ～、間一髪だったね～よかったよかったぁ間に合って～』

「……亡国機業（ファントム・タスク）と仮面ライダーが一緒に出てくるなんて酷いよね

？泣きたくなるよね？」

ナスカ・ドーパントこと『N（エヌ）』は助けられたマジシャン・ドーパントと戦っていたビル建設の工事現場にいた。

『ん～ふ～ふ～、まさか逃げたと思ったら逃げてなかったなんて思わないよねぇ…た～の～し～い～ね～ぇ～』

「いや……全然楽しくねぇし、それに亡国機業（ファントム・タスク）のほうは気付いていたと思うし……怖い」

マジシャン・ドーパントは爆発に気を向けさせて、鏡を使ってそこからいなくなったように見せかけたのだ。

『あっ、そうだぁ。『U（ユー）』から伝言だよぉ。「レンティア・オルコットはもういい。『O（オー）』のほうを手伝え」ってさぁ』

「え？レンティア・オルコットのほうはもういいの？マジで？俺の努力は一体なに？」

『えっとぉ…無駄な努力、儚い努力、報われない努力、見ていられない努力に…』

「……容赦無いね。俺のライフはもうゼロよ！」

ｏｒｚの状態になっているN（エヌ）を見て笑っているマジシャン・ドーパント。

「ん～ふ～ふ～、じゃあ行こうかぁO（オー）ちゃんの所～」

変身を解いてN（エヌ）の腕に抱きつくマジシャン・ドーパントことM（エム）に驚く。

「えっと…行くのは良いけど、なんで腕に抱きつく？」

「O（オー）ちゃんに見せつける為だぜぃ～」

「……何を見せつけるんだ？」

「ん～ふ～ふ～、鈍感だね～」

は？何が鈍感なの？と言うN（エヌ）の腕を引っ張っていく。

「さあ～、行こう～！」

「ちょ、まっ！つ、強く引っ張らないで！コケる！コケるから！って言うかどこ行くの？」

「う～ん？それはね～」

そう言ってM（エム）はN（エヌ）の耳元に囁くようにこう言った。

「I～S～が～く～え～ん～だよ♪」

「あ、私の名前とさっきの亡国機業（ファントム・タスク）さんの名前って被ってるよね」

「……そうですね」

第十六話：「ん～ふ～ふ～、鈍感だね～」ｂｙＭ（エム）（後書き）

次は学園サイドの話です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8571v/

IS:仮面ライダーW

2011年12月28日02時49分発行